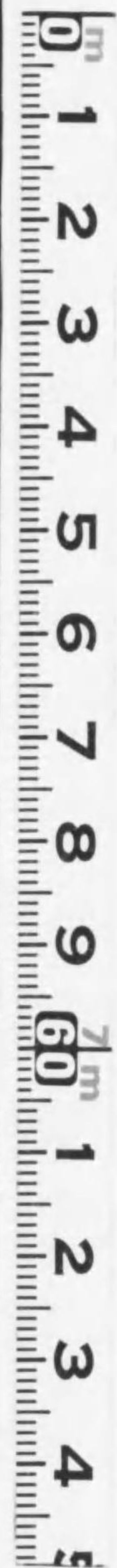


F13
0.73

大坂幸著

二二の家郷あり



始



F13
0.73

大坂土吉著

二二に家郷あり



965
138

目次

青柳村は美しき村

三

若先生家に歸れば

三一

志氣太さんは大嫌ひ

六〇

月月火水木金

八六

勇士家に歸れば

一二八

醫師といへども

一八〇

海 ひらく

二一五

牛の眼はなぜ赤い

二四五

村いちばんの愛郷者

二七〇

街 にて

二九一

螢 ひとつ

三一八

金魚にも心あれど

三五一

風 雨 近し

三七二

江戸のかたき長崎で

四一八

西行き東行き

四七三

ここに家郷あり

装幀 吉田貫三郎

青柳村は美しき村

小田原の向ふで見たとときにはクツキリと晴れてゐた富士の姿も、沼津を過ぎて裾野の平野にさしかゝるころには、頂きのうへに妙な笠雲をかむつて奇態な姿を見せはじめた。

東京を朝の十時に發つた下關行の急行列車――

その三等車の一隅にデンと腰を下ろして、窓枠に片肘をつきながら、まるで白い綿の鐵兜をかむつたやうなその不思議な富士の姿を、ボンヤリ見送つてゐる一人の青年がある。

年の頃、二十九か三十。デツブツと小肥りに肥つた堂々たる體軀に、あたりまへの背廣を着て、常人よりはやゝ大きな顔——悪くいへば、少し間が抜けてゐるやうな——良くいへば、見るからに氣宇雄大、正に大東亞的感興を催さすやうな——さういふ大らかな顔の上に、あまり長くない髪の毛を、モヤ／＼と無雜作にかきあげてゐる。

こんな風に書くと、まるで茫漠として締りのない、纏まりのない顔のやうに思はれるけれど、事實は決してさうでない。

さういふ一種名状しがたい雄大な顔のまん中に、まるで女のそのやうないともやさしい線を見せて、クツキリと切りひらかれてゐる一重瞼の兩の眼の中にはこれはまた、たゞならぬ叡智の光が炯々としてみなぎつてゐるのだ。

倉松志氣太——

それが、その青年の、名前であつた。

彼は、醫者であつた。數年前に大學を卒業したばかりの、若い醫者であつた。尤も、醫者、といつても、それはたゞ彼の職能上の呼稱であつて、倉松志氣太のひととなりといふものは、世の常の謹嚴なる醫者としては、いさゝか似つかはしくないやうな、妙にケタのはづれた何物かを持つてゐた。

ひとくちにいふと、彼の性格は、彼を常に、單なる技術家としての狭い職能の殻の中に、閉籠らして置きたがらないのである。

一例をあげれば——國家のため、或は國民のため、正しい仕事、爲すべき仕事——といふやうな事にぶつかつたりすると、問題の大小を問はず、彼は自分の職能の限界といふやうなものを、うつかり踏み破つてまでも前進しようといふ、見やうによつてはいさゝかおつかないみたいだ、だが、それだけにまた、まことに得がたく愛すべき（戰車的情熱）とでもいつたものを、持つてゐるのであつた。

——いづれ、そのやうな野放圖もない志氣太のひととなりといふものは、物語

の進行と共に追々御紹介も出来ようとは思ふが、兎に角、さういふ志氣太が學校卒業後、今日まで三年間に亘つて没頭してゐた研究室生活に別れを告げて、いま久し振りに（さうだ、卒業以來はじめてゝあるから實に三年振りに）懐しい故郷の田舎へ引上げようとしてゐるのだ。

志氣太の郷里は、東京から急行で五時間——日本有数の製糸業地として、信州諏訪と共に鳴らした富橋市を距たる一里あまり——その名も美しい、青柳村にあつた。

村で、たつた一軒の開業醫。

（仁天堂、倉松醫院）

——それが志氣太の家であり、志氣太はその仁天堂の「若先生」なのである。

二

やがて列車は幾つかの都市を、町を、村を、はしり過ぎて、長い美しい濱根湖の鐵橋を渡り、赭土の地肌もあらはな高瀬ヶ原の高地を登りつめると、間もなく車窓の兩側には、懐かしいふるさとの山河が、靜かに姿を現はしはじめた。

すると、一見茫漠として些少なものは動ぜぬらしい志氣太の顔にも、流石に一抹の感傷の色が、いきいきとして漲りはじめた。

——右側の窓のはるか彼方には、はげしく尖つた本郷山とそれにつらなる一連の峰々が、暖かな早春の陽射しの中にたゞすまひ、すぐ手前の木立の蔭からは、異様な鉢巻山の姿が突兀として現はれだして來た。なつかしい東美川の緑の原野は、その二つの山塊の間に、長く深く、廣々と横たはつてゐるのだ。

眼を轉じて左側の窓の外を見れば、そこには、遠く色香岬につゞく夏見半島の山野が、はるかに黒潮のいぶきに霞んで、ホノ／＼と打ちつらなつてゐるではないか。——ふと見れば、その空の彼方には、轍の音に消されて爆音は聞えないが

鳥かと思まがふ三機の飛行機が、悠々として西の方へ飛び進んでゐる。

やがて志氣太は、静かに立ちあがると、網棚からトランクを下ろし、帽子をかむりながら、もう一度窓の外の風景へ、感慨をこめた視線を投げかけるのだつた。

——すべて、これらの山野は、志氣太が中學を卒業するまで、毎日のやうに眺め、親しみ、その中に育つまれ來つた渝らざるふるさとの姿であり、そしてまた今日からふたゝび、その中で生き、その中で、悩み、笑ひ、怒り、愛するであらう渝へがたき山河の姿なのであつた。

ところで、列車は、そのやうな柄にもない志氣太の感傷にはお構ひなく、間もなくはげしい汽笛と共に、富橋の市街へ滑り込んで行つた。

窓の外には、急に、夥しい製糸工場の煙突が現れはじめた。けれど、その無数の煙突からは、曾て志氣太が、親しみ、覚えてゐたほどの、黒々とした威勢のいゝ煙りは、流れ出てはゐなかつた。——すると、たちまち志氣太の顔からは、感

傷がふツ飛んだ。

汽車は、停つた。

志氣太はトランクをさげてホームに降りると、前と同じやうな茫漠たる顔つきに戻つて、ノシ〜と歩きはじめた。

と、この時。

「お歸りなさいまし」

ふと優しい聲に呼びかけられて、志氣太は立ちどまつた。

すぐ眼の前の、階段の昇口のところから、和服姿の一人の娘が、駈よつて來たのである。

「おゝ、ちいさんぢやないか……迎へに來てくれたの？」

あたりを歩いてゐる人達が、思はずふり返つたほどの大きな聲で、志氣太はさう叫ぶと、いきなり片方の手で、娘の肩をどんと叩いた。

娘は、こみあげる懐しさと羞らひをもてあましたやうに、いそいで身を屈め、志氣太の手からトランクを取らうとした。がその手を軽くかはされると、思はずやり場に困つたやうな顔をホンノリと赭らめて志氣太を仰ぎながら、急に、氣づいたやうにお辭儀をした。

志氣太は、だが、はなはだ無感動な顔つきで、前と同じやうに、大きな聲を出して云つた。

「やア、ま、挨拶はあとで……兎に角、外へ出ませう」

三

娘の名前は

(石渡千尋)

——志氣太の母の遠縁にあたる家の娘で、四年前に女學校を卒業すると、頼ま

れて手不足の倉松家へ、手傳ひに来てゐるのだった。

看護婦代りに醫院の仕事もすれば、志氣太の母の日常の細かな相談相手にもなるといふ——お客でもなければ、使用人でもない、至極氣のおけない存在で、みんな彼女のことを

「ちいさん」

「ちいさん」

と呼んでゐる。

千尋の家は、青柳村とは眼と鼻の富橋市にあつた。大きな店といふよりは、老舗として知られてゐる呉服店——

(月屋)

その家の、千尋は次女であつた。

兄の信吉は、いま、南方の戦野にあり、姉の萬壽子は、老舗の娘然として、嫁

入仕度に忙がしい。が、千尋は少し變つた娘で、好んで青柳村の倉松家から戻らうとしない。

尤もこれには、六年前に亡くなつた彼女等の父が、永い病氣のそのあひだ、志氣太の父から特別な診療上の骨折を受けた。その恩義に報ゆる氣持があつたからかも知れない。

で、月屋は、目下彼女の母であり、昔氣質な未亡人であるくするが、嬰鑠として一人で切りまわしてゐるのだ。

「あゝ、ちいさんのお家、みんな達者かね？」

陸橋の上をあるきながら、志氣太が、思ひ出したやうに大きな聲で訊ねた。

「え、ありがたうござります。みんな、達者ですわ」

「兄さんから、便りある？」

「えゝ。時どき……」

「——今日は、出たついでに、お家へ寄つてくんでせう？」

「いいえ。もう、先にすまして参りましたから、これから、御一緒にお供いたします」

志氣太は、黙つて歩きだした。

間もなく、二人は、驛前の廣場に出た。

志氣太は、立止つた。そして少し體を反らすやうにして、まん中の鋭い眼がなかつたなら、まるで大きな水母の背中みたいにしか思はれない、例の雄大な顔をおもむろにめぐらしながら、三年振りに見る富橋の街を、シミ／＼と眺めるのだつた。

(おゝ、なんといふ、家根の低い、鄙びた、小さな街よ！)

學生時代に、休暇で東京から歸つて來る度毎、なんども味つゝゐたと同じあの感覺が、今日はひとしほ深く、ピンと來た。

と、いつても、決して彼は、みぢめな氣持になつたり、一種の侮蔑を覺えたりしたわけではない。いやそれどころか、まるで自分の顔を鏡で覗いた時のやうなしみじみとした愛着と、それから、これは志氣太の場合だけのことであるが、幾分の、明るい闘志——とを覺えたのであつた。

いひ忘れたが、志氣太が、三年間の研究生生活に別れを告げて、故郷へ歸つて來たのは、たゞ單に、慢然と親爺のあとを嗣いで、従來通りの（仁天堂、倉松醫院）の院長にをさまるだけのつもりではなかつたのだ。

全く、既に讀者もご存じの通り、醫者であると同時に、場合によつては醫者以外のものにもなり兼ねないやうな志氣太のことであるから、このやうな場合にもたゞ慢然と歸郷するばかりでなく、その胸底に、なにか若々しい野望を抱いてゐたとしても、あながち、不思議はないわけであつた。

四

志氣太の父であり、仁天堂倉松醫院の現院長である倉松龍樹氏は、最近とみに老境に進み、手足がぶるぶる顫へてようやく診療に困難を來しはじめたので、都にあつて新しい醫學の研究に没頭してゐる伴の志氣太を、呼戻すことにしたのであつた。

志氣太が、東京を引上げることになつた直接の動機といふのは、それであつたが、けれど、前にも云つたやうに、たゞそれだけのことで、彼は慢然と田舎へ歸るのではなかつた。

志氣太が田舎へ歸るといふことは、老いたる龍樹氏の切なる希望であると同時に、志氣太自身の熱烈なる意志であつた。

まことに、もしも志氣太が、父なる人の希望を容れず、これ以上べんべんとし

て研究室に閉ぢこもつてゐたならば、彼が愛する青柳村は、正に
(醫者のゐない村)
になるのである。

——いまや、皇軍は、太平、印度の兩洋を確保し、はるか米英の本據にまでも
迫らんとしつゝあるの時、世界變革の震源地たるわれらの郷土に、どうして(醫
者のゐない村)などといふおぞましき存在がゆるされようか……。

と、まア、志氣太は考へたのである。
むろん、彼としても、そのやうにいきましい抱負をいだいてふるさとへ戻るか
らには、青柳村を、たゞの(醫者のゐる村)にして置くだけではすまされぬ。
さう云つては甚だすまぬが、親爺の龍樹先生よりは、お蔭で少しは新らしい學問
を身につけてゐる志氣太である。

青柳村をして(病人の少ない村)(みんな元氣でせつせと働ける村)——さうい

ふ立派な村に仕立て上げ、なほまた進んで恵まれぬ人々の中に、新らしい文化の
灯をガツチリと打ち立てることが出来るならば、たとへこの身は、一生草深い田
舎に埋もれ、且また、場合によつては、土藏の一本や二本は叩き潰したつて敢て
悔ひない!

——などと、龍樹先生が聞いたなら、忽ちひきつけてしまひさうなことまで、
どうやらチラホラ考へてゐるのである。

と云つても、むろん志氣太はこれから村へ歸つても、すぐに取りかゝらうとい
ふやうな、具體的な施策や方針を、既に用意してゐるわけではない。

だいたい志氣太は、左様にケチ臭いあわて者ではないのであるし、又そのやう
なやりかたは、そもそも科學的ではないのである。

彼は、いま 白紙である。まづ落ついて、久し振りの郷土の實情を深くさぐり
その上で、おもむろに方針を立てよう、と考へてゐるのだ。

ところで、このやうな抱負や情熱を抱いて田舎へはいつて行く若い醫者は、今までにも何人かあつた。そしてさういふ連中に對して、一部の人は、憫笑と共に云つたものである。

「ふん。奴さんも、間もなく骨抜きになつて、すごすごと再び都會生活に戻つて来るさ」と。

だが、倉松志氣太がどのやうな人間であるか、よく心得てゐる彼の先輩達は、決してさういふ危惧は抱かず、明るい微笑を以つて、彼の前途に祝福と激勵を投げてくれたのであつた。

「あの、バスが出ますから、お急ぎになりません」
さつきからしきりに促してゐる優しい千尋の聲に、やつと我にかへつた志氣太は、やゝあわてた足取りで、驛前にとまつてゐる（青柳廻り富川行）の木炭バスの方へ、ノコノコと駈出して行つた。

五

子供の玩具箱のやうな、明るい郷愁をそそる、木炭バスであつた。

ところどころはげかかつた車體のペンキにも、赤いリンゴのやうな車掌さんの頬にも、ふるさとの匂ひが満ちあふれてゐた。

いちばんどん尻の、ピロイドの色が變つたやうな座席の上へ大きな志氣太と、小さな千尋がキョトンと並んで腰を下ろすと、バスは動きだした。

すると、二人の尻の下が、いきなりキイキイと異様な音を立ててゆればじめ、なにか話しかけようとした千尋は、すくなからずあわてて、はづかしさうにさし俯向いた。

どうやらお客は、いまのところ二人だけらしい。

「——親爺はどんな風かね？……毎日、患者は診てるの？」

ゆられながら、志氣太が訊ねた。

「ええ……」

千尋は云ひよどんで、

「二、三日、お風邪でおやすみでしたが、でも もう今日は、お起きになりました」

「時々、やすむらしいね」

「ええ——するぶん、ご無理なさつてゐらつしやいますから……でも、もうこれで、ほんとにお樂になれますわ」

千尋は、まぶしさうに志氣太の顔を仰いだ。

「——親爺も、もう、停年だからねえ」

「あら、お医者様にも、停年がございますの？」

「別に、さう定まつたものはないさ。ただ、僕が勝手に考へてゐるだけのことだ

がね……それはさうと、ちいさんも、見違えるほど綺麗になつたね」

「あら」

いきなり投げつけられた言葉に、千尋はすつかり戸惑つて、うつむいてしまつた。

志氣太は、しかしもうケロリとしたもので、窓越しに、後ろへ流れ去つて行く富橋の街を眺めてゐた。

妙に軒の迫つた家々の間に挟まれて、見覚えのある懐しい商店や醫院の建物などが、チラホラと流れて行つた。

やがて、橋を渡つて、街外れに近い停留所で、バスがとまつた。

と、非常に大きな風呂敷包を背負つた、田舎風の小母さんが一人、乗込んで来た。

狭い入口のところを苦心して中にはいると、車掌へ

「ほい、この車ア、馬窪へも行くづらのん？」

「いゝえ参りません。青柳廻り富川行です」

「ほんとかん？ そりやアいかん。ほい〜停めとくれん」

あわてた様子で、再び入口のところを、苦心しながら降りていった。

志氣太の顔には、明るい微笑が浮んだ。が、それは、小母さんのあわてぶりが可笑しかったからではない。久し振りに聞いたふるさとの方言について、一つの発見をしたからだ。

中學から高等學校へ行く頃には、志氣太は、自分の郷土の方言が非常にきらびであつた。侮蔑さへしてゐた。それが、大學を出る頃になると、少し進んで方言のよさも理解するやうになつて來た。がしかしそれは、東北辯とか九州辯とかに限つてゐた。ところが今、志氣太は、自分の郷土の方言の中に、他のいかなる魅惑的な方言の中にも見られない、獨特の暖かさや柔かさを発見したのだ。

——バスは、やがて、富橋の街を出はづれた。

六

街を出はづれた木炭バスは、急に伸び伸びと威容を増して、わが意を得たかの如く、畑の中の一本道を、白い埃をまき立てながら驀進しはじめた。

「おや、もう麥が、あんなに伸びてゐる」

「桑の芽も、ふくらんでゐますわ」

「あの、向ふに見えるのは、菜の花かな？」

「さア……」

「もう、雲雀も飛び立つだらうな……」

「さういへば、お庭の彼岸櫻が咲きはじめてゐましたわ」

「ほう、あの櫻がね……いや、田舎はいいなア……」

「——でも、東京の方が、好きなんでしょ？」

千尋は、少し迷つてから、思ひ切つたやうに云つた。その聲は、かなしい不安を軽くはらんでゐた。

「そんなことはないよ」

「ぢや……やつぱり、田舎が好き？」

疊みかけて来るやうな千尋の妙な質問に、志氣太は、やや當惑したやうに押し黙つた。

もとより志氣太は、都會主義者ではない。が、さりとして、無條件な田園主義者でもない。だいたい、このやうに複雑な問題を孕んだ質問に、さう簡単に答へられるものではない。で、

「うん、まあね……」

と、いい加減にゴマかして置いた。

やがて、バスはいよいよ青柳村へやつて來た。

いちめんに青々とした麥畑。大きな長いブラシを寝かしたやうな廣い桑畑。その向ふに細長く光つてゐる學校の屋根。いつになつても變らないゴテゴテとした家並。地主の家の白い高い土藏。お宮の森。役場の側の火の見櫓。その下に小川があつて子供の頃にはよくメダカをすいたものだ。そのまた小川の洗場のそばには、グミの木と無花果の木があつて、木登りやブランコはもつて來いだつた。

志氣太の顔には、あの、汽車の中で遠く故郷の山河を望んだ時に浮び上つたと同じ感傷が、再び柄にもなく漂ひはじめた。

間もなく、バスは、村のまん中の、廣場のところまで停つた。

二人は、車を降りると、小さな町並を抜けて、倉松醫院へ通じる通りを、歩き出した。

道には、いちめんに枯笹の葉が散り敷かれ、その中に混つてまつ赤な椿の花が

一つ二つ落ちてゐた。

やがて、よく刈り込まれた、古い高い立派な細葉の生垣にかこまれて志氣太の家が現れた。

その細葉の生垣のまん中に、古風な冠木門があつて、永い間の風雨にさらされて墨痕もおぼろな（仁天堂、倉松醫院）の看板がかゝつてをり、その門の中には両側を芝生にはさまれた敷石道が、まつすぐに、式臺のある玄関にまでつづいてゐるのだ。

志氣太は、ムツと黙つたまま家の前までやつて來ると、流石にちよつと立ちどまつて、古風な冠木門を見上げるやうにした。がすぐに、うしろの千尋を軽く見返りながら、家の中へはいらうとした。

その時だつた。

後ろを見返つた志氣太の視野の一端に、さつき見た椿の花のやうな、いやそれ

よりもずつと明るく華やかな色彩の塊りが、サツとばかり流れるやうに映つたのだ。

——このやうな田舎には、とても信じられないやうな、妖しくも美しい、花のやうな少女のうしろ姿だつた。

志氣太は、思はず立ちどまつた。

七

二十を出たか出ないか知らぬの、若い美しい女性だつた。

眼のさめるやうな紅葡萄酒色の羽織を着て、いふところの電髪とやらをかけた豊かな髪の毛をたてがみのやうに肩へ垂らし、志氣太の家の向側にあたる高臺の坂道のはうから風のやうに出て來ると、たつたいま志氣太達が通つて來たばかりの道をバスの停留所のはうへ向つて、たぶん富橋の街へでも行くのであらう。こち

らのはうは振り返りもせず、サツサと裾を散らしてあるいて行くのだ。

「稲垣さまの、お嬢さんですわ」

「——あゝ、矢奈さんか……大きくなつたなア」

千尋の言葉に、やつと志氣太は気がついて、呟くやうにいつた。

——向ひの高臺には、村でいちばんの、いや、この近在でもいちばんの、大地主稲垣兵衛の邸があるのだ。

その兵衛の、矢奈子は娘であり、その矢奈子ならば、志氣太もよく覚えてゐた。

「東京の女學校へ、行つてたつていふぢやないかね？」

「えゝ。でも、もう二年前に御卒業になつて、いまではすつとお家ですわ」

なんといふことなしに微笑を浮かべながら、千尋は答へた。

「あちらで、お逢ひになつたことございませんの？」

「いや、いちども逢はん」

やがて、志氣太は向き直ると、千尋の先きに立つて、門をくぐつた。

敷石道は、醫院の正面玄関の前で二つに岐れ、その一つが普通家人の出入りする内玄関のはうへ、庭を廻つて通じてゐるのだが、そこから、老龍樹先生の車夫であり、この家の作男である松太郎が飛び出して來て、

「やア、若先生。おかへりなさいまし」

懐かしさうに挨拶しながら、荷物をもぎとるやうにして受けとつた。

松太郎の後ろからは、氣配を知つてか、志氣太とはまるで違つた、小さな、色の白い、善良さうな顔をした母の悦が駆出し、庭の植込越しに見える母屋の廊下の中では、いまでも老龍樹先生が、立派な髭をはやして、漢學者然とした顔を硝子戸越しに、こちらへ向けながら、稜々として枯木の如き躰を、籐椅子からやをら、起しかけてゐるところだつた。

志氣太は帽子をとつて、その父と母へ會釋しながら、内玄関の格子戸をあけて

家の中へはいつて行つた。

——かうして、志氣太は、野太い青春を抱いて、恵みうるはしい東海のふるさとへ、青柳村のわが家なる、倉松仁天堂へ歸つたのである。

さて——讀者の中には、いまや、志氣太の郷土の所在について、いろいろと臆測をめぐらしてゐられる方が、或ひはあるかも知れない。むろん、青柳村は實在の村である。しかしながら、なにもそのやうに詮索されなくとも、ひとたび臉を静かにつむつて下さるならば、そこに、マザマザと、青柳村は浮び上つて來るに違ひない。

人には、誰にでもふるさとがあり、そのふるさとは、町であらうと、村であらうと、必らずや、多かれ少なかれ、ご覽の通りの、また、これから御紹介する通りの（青柳村）があるに違ひないからである。

若先生家に歸れば

—

「ちいさん。踏臺を持つて來てくれないか……ついでに、金槌と釘拔も頼む」

平常着の背廣の上へ白衣を着て、すつかり醫者らしくなつた志氣太が、患者待合室のまん中に突ツ立つたまゝ、隣りの藥局で診療簿カネナの整理でもしてゐるらしい千尋へ、例の大聲で、かう呼びかけた。

「はい。只今」

椅子の音をさして立ちあがると、廊下傳ひに母屋のはうへ、千尋は出掛けて行つた。

志氣太が家に歸つてから、もう五日目の朝のことである。

ムキ出しの背廣姿で、下關行の急行車の中などにおさまつたりしてゐると、まづどう見ても、大陸通ひの國策的人物——とでも云つた感じの志氣太であつたがかうして白衣をつけると、兎に角お醫者さんらしくなつて來るから妙なものだ。

やがて、千尋が、踏臺や金槌を持つて、待合室へやつて來た。

これも、黒つばい銘仙の上に、汚點一つない純白のエプロンをつけて、どう見たつて、老舗の呉服屋のお嬢さんなどとは思はれない。まづ、きりツとしたやゝ智的な働く女だ。それも、しかし彼女の場合は、さういふどちらかといふと少し冷たい外觀にもかゝはらず、その冷たさの下から、例へば、襟元にちよつと覗いてゐる着物の柄の好みといひ、おとなしい型の頭の髪につけてゐる小さな道具の好みといひ、そのほか何處といふことなしに、いかにも老舗の呉服屋の娘らしい、みやびた艶が、意識せずじみ出てゐて、それをまた隠さう隠さうと、上か

ら押へつける冷たい外觀にもかゝはらず、なほ且自ら下地はにじみ出して來る——といった、そのところに、何んともいへない美しさがあるのだが、残念ながら左様な微妙さは、志氣太にはほとんど判らない。いや、判らないといふよりも、だいたい彼は無頓着なのだ。

「なにをなさいますの？」

「うん。額を外すんだよ」

「まア、この額を？……どうしてお外しになりますの？」

だが、志氣太はそれには答へず、早速踏臺を構へて、その上へ大きな體をつけると、待合室の入口の上のところに、部屋の奥のはうを向いてかゝつてゐる、一面の、古い横額を、とりはづしにかゝつた。

その額の、黒くなつたやうな紙面には、遶筆で次のやうな言葉が書いてある。

來者不選去者不追

——隅のはうに、ジャワ島みたいな恰好の、大きなシミが出来てゐて、落款はよく讀めなかつたけれど、なんでも、志氣太の父の龍樹先生が、明治何年とやらにさる大先輩から書いて貰つたものだとかで、以來何十年といふ長いあひだ、この仁天堂の待合室にかゝつてゐるといふ、實に貴重な、由緒ある歴史的存在なのであつた。

ほんたうの讀み方は、なんと讀むのかは知らなかつたけれど、千尋は、その言葉の意味の易しさに、書かれてあるまゝを素直に（くるものはえらばず、さるものはおはず）と讀み、さう解釋して、いかにも龍樹先生に應はしい高潔な言葉だと、もうすつと以前からひそかに感心してゐるのだつた。

それを、その貴重品を——謂はゞ、仁天堂の眞の看板ともいふべきその貴重品を、いま、志氣太は外さうとしてゐるのだ。

（なんとといふ無茶な若先生だらう）

千尋は、なんだか心配でハラハラして來た。

二

「そんなお大事なものを、おはづしになつても構ひませんか？」

千尋は、見兼ねて、もう一度聲をかけた。

志氣太は、相變らず答へもせず、踏臺の上へ伸びあがつたまゝ、上のはうから落ちて來る何十年といふ昔の埃りに顔をしかめながら、盛んにゴトゴトやつてゐる。

——實をいふと志氣太は、この額の文句がなんとなく物足りなく、性に合はないのだ。

（來る者を選ばず）は、まアいい。樂な人であらうと、困つてゐる人であらうといやしくも、自分を頼つて病氣を訴へて來た者に對しては、誰れであらうと全力

を盡して癒すべく努力する。これはもう、なにも志氣太に限らず、現に何處のお
醫者さんでも立派にやつてゐる通りだ。しかしながら、そのあとの文句（去る者
は追はず）がいさゝか志氣太には、物足りないのだ。といつても、むろん、去る
者をムリに引ツ張つてまでも（金にしよう）なぞといふ、嘗て存在した或る種
の場所の客引のやうなマネを、醫師たる志氣太がしようといふのではない。志氣太
の場合は、かうなのだ。

——なるほど、正しい意味で患者が醫者を變へなければならぬ場合は往々あ
る。が、いま世の中で、醫者を變へ、或は醫者のもとを遠去かつてしまふ患者の
中には、患者自身の無知によつて醫者を誤解し、轉々と無意味に動き廻る患者だ
とか、薬價がたまつて足踏みしてしまふ患者だとか、或ひは貧しい人のために國
家が着々講じつつあるいろいろの施策を知らないでゐて、充分活潑に利用せずか
また利用出來ずにかけて遠去かつてしまふやうな患者だとか、或はまた、單なる

意志薄弱のために大事な治療を途中で投げ出してしまふ患者だとか、等々がなか
なが多い。——それで、このやうな無知、不識、躊躇、怠惰といふものが、あら
ゆる病氣の中でも最大の病氣のひとつであり、それと闘ふことにも全力を盡さう
と考へてゐる志氣太は、時によつては去り行く者を、黙つて見てゐることなぞ出
來ない場合が往々にして生ずるかも知れないのであつて、このやうなやや常識ば
なれのしたおせつかいな志氣太の眼から見ると、この額の後の方の文句はなんと
なく指導性に乏しく、消極的で冷やかにさへ感じられるからであつた。

「——むろん、お父さんの時代は、これで立派なものですよ。しかし、僕には、
どうも性に合はんです。頭がつかへるやうな氣がするんです。まアひとつ、茶の
間へでも退却さして下さい。又その方がお父さんの人格にも一層ピツタリ來るで
すよ」

志氣太はさういつて、最愛の息子が歸つてくれたのですつかり上機嫌になつて

ゐた善良な仁天堂先生の、古風な衞びを柔かく諷しきへしながら、苦もなく許しを得たのであつた。

「あゝ、親爺は、はづしてもいゝといつたよ」

背伸びをしたまゝ、やつと志氣太が、千尋へ答へた時だつた。

いきなり、物凄く埃を立てながら、紐が切れたのであらう。天罰みたいな勢ひで、額が落ちて來た。

千尋は、埃を避けるやうにして急いで飛び退きながらも、志氣太のはうを見て思はず吹き出してしまつた。

——それは、物凄く埃や蜘蛛の巣を全身に浴びたまゝ、踏臺の上につツ立つてゐる志氣太の恰好が、いつか志氣太の母と一緒に參詣した、ここから十里ばかりの奥にある、あの、佛法僧のラジオ放送で有名な、寶靈寺の山門の、仁王様にそっくりであつたからだ。

三

「ははは……たうとう外づしてしまつたな」

埃をはらつた額を提げて、志氣太が茶の間へはいつて行くと、縁側の目溜りに出した籐の寝椅子へ横になつて、新聞を讀んでゐた龍樹氏が、體を起しながらさういつて笑つた。

「まア、いつまで續くか、その意氣でやつてみるがいい」

志氣太は、茶の間の鴨居のところへ、新らしく額をかける仕事をはじめながらいつた。

「いや、僕に意氣があるわけぢやアないですよ。——世の中が、大きく動き出したんですよ」

龍樹氏は、急に眞面目な顔になつて、靜かに頷きながら

「ふム、さうだ。或ひは、さう云へるかも知れんな……世の中はすつかり變りはじめてをる。日本が、世界の日本になるのちやからなア……國民醫療法も出來たことだし、いづれ、醫者なども、公營になるんぢやらうな」

「……ま、ゆくゆくは、さうなるでせう。さうなるのが本當でせう」

「しかし、さうなると、大きな公營病院の醫員みたいなもので、扱ひが不親切だといふやうなことを、患者がいひ出すやうな場合も、生じることぢやらうな」

「いや、それは、不親切——とはちよつと違ひますよ。——ぶつきら棒とか、率直とかいふべきでせう。むろん、中には、ほんたうに不親切な者も一人や二人は出て來るかも知れませんが、それは吾々が、一等國の衛生指導者としての大きな衿りを持つて、お互に戒め、慎み合はねばなりません、しかし患者としても、いゝ意味での率直とか、ぶつきら棒とかを、不親切と混同しないやう、反省して貫はねばならぬですね。いつたい、良い醫者に率直に扱はれるくらゐ、患者にと

つて幸福なことではないですからね。可怪しな意味の口先療法ムシキリなどよりは……」

「いやそれが、患者には判らないからいけない」

「判らせるんですよ」

「いやそれは、醫者の仕事ではない。そこまではとても……」

「——僕は、それをやります。それだけではなく、他のどんなことでも、必要とあれば出來るだけやつてみます。いつたい醫者のことに限らず、いま日本の國內で、最も大事なことは、啓蒙だと思ひます。どんな問題についても、どうするべきかといふことを、みんながその氣になつて、お互に理解し、理解さすべく努力し、前進しなければ、日本の前進は輝く軍隊だけの前進になつてしまひます。——ですから、僕は、場合によれば、地方の文化運動などにも、大いに參加してみようと思つてをります」

いつの間にか志氣太は、胡坐をかいて、話し込んでゐた。

龍樹氏は、髭を撫ぜながら言つた。

「お前がさういふことを考へとるなら、いちど、定森の喜惣きそうさんに會つてみるといいな。あの男は、よく、さういふ、地方文化——といふやうなことをいつてをる」

「ほう。あの、たしか役場に出てゐる、農會技術員だかの、定森君ですか？」

「うん。熱心な百姓だ」

「——いつかまた、會つてみませう」

志氣太はさういつて、二つばかり大きく頷いた。

その時。

「おや、お話中ですか？」

襖をあけて、母の悦が、小さな白い顔をニコニコ綻ばせながら、部屋の中へはいつて來た。

四

「おやおや、額のおひつこしも出來ましたね」

茶の間へはいつて來た悦は、暫らく立つたまゝ、志氣太が新らしくかけた額を笑ひながら見上げてゐたが、やがて、氣をとり直したやうに向き直つて、縁側の藤椅子のはうへ近づくと、龍樹氏へ云つた。

「あなた。あの、昨夜の事、志氣太へお話しになりましたですか？」

「あゝ、いや。まだ話さないがな、いづれ夜分にでもゆつくり話さうと思つてな……」

「なんですか？ どういふお話ですか？」

志氣太が口を入れた。

「いやなに、別に改まつた話ではないのぢやが……」

龍樹氏は、悦のはうへチラと視線を流しながら、

「——つまり、お前の、嫁の話ぢやがな。……まア、かうしてお前も歸つてくれたことだし、この際ひとつ、適当な配偶者を見つけて、迎へることにして貰つたら、それでわしも、ほんとうに樂になれるといふわけだな……、まだ、別にこれといふ候補者があるわけではないが、一應お前の氣持も聞いて置いて、追々心掛けねばなるまいと思ふのでな……」

——志氣太には、弟が一人あつたが、中學へ上ると間もなく死んでしまつて、龍樹氏夫妻にとつては、いまでは志氣太が、たつた一人の大事な息子だつた。さういふ息子が、立派な一人前になつて、自分達のあとを嗣ぐべく歸つて來たのであるから、龍樹氏夫妻の喜びは云ひやうもなく、早くもそのやうな膳立となつて志氣太の前へ持ち出されたのだつた。

志氣太は、しかし、流石にややテレ臭さうな色を浮べながらも、案外無感動な

顔つきでいつた。

「あゝ、さういふお話ですか——結構なことですが、しかしそれでしたら、まアあまり急がないで下さい」

「いや、別に急ぐといふわけではないが、もうお前も充分な年齢ぢやし、わしたちも、そろそろ隠居しなければならんでな……それに、かういふことは、さアといつて、すぐに相手のみつかることではなし。まア、氣持の用意だけでもしといて貰はんとな……むろん、もうお前も立派な一人前のことぢやから、わし達としても、別にお前の氣持を無視して、勝手な嫁を押しつけようなぞとも、思つたらんからのう」

「それにねえ、志氣太や」

と、母も口を入れた。

「——あの、ちいさんにしたつて、いくら縁續きたといつてもさういつまでも借

りて置くわけにもいきませんからね。ちいさん自身は、いくら醫院の仕事なぞが好きだといつても、あのこだつてちゃんとした家の娘ですから、何れ姉さんの萬壽さんが片附けば、こんどはあのこの番ですからねえ……それに、家にしたつてそりやアお掃除や臺所の仕事は、松太郎の嫁が、今まで通り働いてくれますからいいけれど、やはりねえ、お前の身の廻りだとか、奥向きの用事になりますと、どうしてもねえ……」

この時、廊下に氣配がして、千尋が顔を出した。

「あの、ポツポツ患者さんが……」

「お——」

志氣太は、ノツシリと立ちあがりながら、父へともなく母へともなくいつた。

「まア兎に角、お父さんお母さんへお委せしときますから、あまり急がないで、ゆつくりやつて下さい。僕の氣持は、いまのところ、仕事のはうでいつばいなん

ですから……」

五

待合室には、もう三、四人の患者達が、詰めかけてゐるらしい様子だつた。

志氣太は、診察室の同轉椅子に腰を下ろしながら、ふと、どうにもならないやうな苦笑を覺えた。

——志氣太は、家に歸つて來ると、すぐその翌日から、父に代つて患者の前へ出たのであるが、すると、最初の日は兎も角も、二日三日四日とするうちに、だんだん患者の数が殖えて、今までに倉松醫院が扱つたことのないやうな大勢の患者がやつて來るやうになつて來た。

——これはいつたい、どういふことであらう。

しかし、考へるまでもなく、志氣太にはよく判つた。

狭い田舎では、例へば——朝、村の一番東はづれの家の嫁ッこが井戸端で轉んだといふと、もうそのことが、その日の夕方までには、一番西のはづれの家の人にまで、すつかり知れてしまふ——といふやうな、まるで電波みたいな物凄しい情報（情報）の宣傳網が自ら備はつてゐて、それで、まづ、善良な一人が

「仁天堂の若先生が歸つたげな」

と放送すると、それが、忽ち村中のアンテナに傳はつて、いや場合によると、隣り村、隣り町のアンテナにまでも傳はつて「若先生が歸つたげな」「若先生が歸つたげな」とばかり瞬く間に近隣近在の人々に知れわたつてしまふのだ。

それと、もう一つ。

これは、志氣太が學校時代の先輩や、また父のところへよく遊びに來た富橋の或る先輩などから聞いてゐたところであるが、善良なる患者の中には、新らしい醫者が開業すると、なんとといふことなしにそこへドツと押しかけるといふ、不思議

議な傾向を持つた人々もあるらしい、といふそのことであつた。

千尋が、手馴れた、やさしい聲で、患者を呼んだ。

最初にはいつて來たのは、背の低い、デツブリと肥つた、丸顔の眼のギョロツとした小父さんだつた。

和服を着てゐたが、職業は會社員だといふ見馴れない人だ。

胃が痛むといふので、胸をひろげて貰つて診察をはじめ。

と、ふと志氣太の眼に、その小父さんの肩の上、特に右肩の上に、異様な瘤み（しこり）たいな、隆々たる肉塊がのつかつてゐて、おまけにチヨロ／＼と毛まで生えてゐるのが、眼にとまつた。

——あきらかに、永い間天秤棒をかつぐ人の、職業的變質だ。

志氣太は、カルテを取りあげて、もう一度職業のところを見ながら、

「あなたは、會社員ですか？」

「へい」

「ははア。どういふ会社ですか？」

すると小父さんは、ちよつと迷つてから、いつた。

「へい……豆腐製造販賣株式會社といふ……こんど出來ました會社で……」

志氣太は、思はず明るい氣持になつた。

——なんといふ、素朴な、善良な患者であらう。

診察を續けながら、

「つまり、豆腐屋さんが合同したわけだね」

「へい、さういふわけで……」

「なにもかも、變るね」

「へい、全く、なにもかもすつかり變ります……豆腐屋だけでなく、八百屋も、

菓子屋も米屋も、呉服屋も……」

志氣太は、ふと、こないだ汽車の窓から久し振りに見た、富橋の街の製糸工場の、煙の出てる煙突の少なかつたことを思ひ出した。

六

診察は終つた。

——慢性胃加答兒だつた。

療法を教へてから、志氣太は、豆腐製造販賣株式會社の小父さんへ云つた。

「あなたは、この村へ来るよりも、富橋のお医者さんへ出た方が近いんでせう？」

「へい、まアさういふわけで……」

「だつたら、富橋のお医者さんへかかつた方がいいですよ——近くて便利です」

「へい。だがもう、暫らく前からかかつてをたつたですが、サツパリ直りませんでね」

「それは、あなたが、酒を呑んだり辛いものを食べたりするのを止めないからですよ。だいたいあなたの病氣は、醫者にかからなくても癒りますよ」

「へ？ かからなくても癒ります？」

「いまいつた通りの、養生さへすれば、必らず癒ります」

「ははア、さうですかい……」

「まあ一つ、頑張つてご覧なさい。必らず癒りますから。その代り、養生しないと、いつまでかゝつても癒らなくなりませよ」

小父さんは、なんだか少し浮かぬ顔をしてゐたが、やがてひとりで頷きながら出て行つた。

カルテは、千尋の方へ廻された。

次にはいつて来た患者は、村の青年で、ここから少しはなれた富川の町の近くに、最近出来た大きな工場の、元氣な工具だつた。今日は、久しぶりの休みだつ

たので、畑へ出たところが、誤つて足をえらく挫いてしまつたとかで、チンバをひいてゐた。

——患者は、次々にはいて来ては、出て行つた。

千尋は、カルテが廻されて来るたびに、眼を細め、顔を紙面にすりつけるやうにしては、そこに書かれてある、志氣太の文字を読みとつた。それは千尋にとつては、ひとかたならぬ面倒な仕事であつたが、同時にまた大へん微笑ましい仕事でもあつた。

——といふのは、カルテに書かれてある志氣太の文字が、非常に小さな假名文字であつたからだ。

いちばんはじめ、志氣太が父に代つて診療をはじめたばかりには、志氣太は今迄の習慣で、つひ何氣なく Diagnose だとか Lungentuberculose などといふ字を書いてしまつて、今まで仁天堂老先生の漢字ばかりを読みなれてゐた千尋が面喰

らつて「あの、あたしドイツ語は判りませんから」と卒直に申出ると、志氣太は「やア、すまん、すまん」と大きな聲で頭をかきながら、早速それぞれ（シンダ）だとか（ハイケツカク）だとかいつた風の日本語に改め、以來もつばら、この日本語の假名書きを用ひるのであるが、ところが、この志氣太の假名文字たるや、まるで虫眼鏡で見なければよく判らないくらいなの、細かな文字なのだ。といつても、これは患者の眼につかないやうにわざわざ小さく書くのではなく、元來志氣太といふ男は、今まで時々両親のところへ寄來した手紙の上書などを見てもその顔や體や氣持の野放圖もなく大きなくせに、文字と來ると特に漢字などと來ると、まるで女みたいにやさしく小さく自信なげな文字しか書けなくて、いつも能書家の龍樹先生を苦笑さしてゐるのだつた。

それが、千尋には、なんともいへない微笑ましさを覚えさせた。と同時にまたさういふ自信なげな苦しきさうな文字を、辛棒強く克明に書き續けてくれる志氣太

の態度に案外な親切さを見つけたやうにも思はれて、彼女は、なぜかうれしかつ

七

さて、けふも千尋は、次々に廻されて來るカルテの上の、志氣太の文字を丹念に読みとりながら、さういふ何んとも云へない微笑ましさを覚え味はつてゐたのであるが、そのうちに、ふと彼女は、この頃の自分が今までの自分とすつかり變り始めてゐることに氣がついて、妙な狼狽を覺えた。

全くさういへば、その風貌や性格などとはまるで反對の、志氣太の不思議に小さな文字を読みとる時ばかりでなく、そのほかのどんな仕事をしてゐる時にでもこの頃の自分は、毎日、なぜか浮き浮きしたところ愉しい氣持で働いてゐるではないか。

むろん、志氣太の歸らない前でも、あの、富橋の家の、薄暗いジメジメした(老舗)の雰圍氣の中で、人形のやうに暮してゐるよりは、この青柳村の仁天堂の方が、餘程明るく愉快かつたには違ひないが、しかしそれでも、志氣太が歸つて來て以來の自分の氣持といふものは、まるで比較にならないくらゐに、一段と明るく、愉しく、やや浮き立つてさへゐるではないか。

(まア、いつたいあたしは、どうしたといふのだらう)

彼女は、自分で意外なほどにうろたへた。

いや、意外な——などといふよりは、寧ろ自分は、かういふ時の來るのを心の隅のどこかでひそかに期待してゐて、それで、今まで富橋の家などよりはずつと明るく愉しいなどと自分に云ひ聞かせて、この仁天堂に踏み止まつてゐたのではなかつたらうか。

——すると彼女は、もう一つの、大變なことに氣がついて、急に耳元まで赭く

なつた。

といふのは、ほかでもない。彼女は、或る一つの、奇妙な癖を持つてゐた。それは、六年前に亡くなつた彼女の父が、まだ死ぬか生きるかの永い病氣で寝てゐた頃の、不安な彼女の少女時代から、いつとはなしに出來はじめた癖であつたが彼女は夜寝る時に、どういふものか片方の掌で着布團のへりだとか、枕の隅のところだとかを、しつかり掴んでゐないと、うまく寝つかれないといふ、なんともヘンな癖を持つてゐた。

尤も、この妙な癖は、彼女が青柳村の仁天堂で暮すやうになつてからは、一時直つてゐたのであるが、それがまた、龍樹先生がすっかり耄祿して、手先をふるはしながら患者の注射をするのなどを見るやうになつてからは、いつかまた再發して、いままでずつと續いてゐるのだつた。

ところが、それが、思へばなんと、この二三日前からは、ふたたびピタリと止

まつてしまつて、確かに、なににも掴まらずに、うまく寝つかれるやうになりはじめてゐるではないか……

——この奇妙な発見に、千尋は内心すくなくからすうろたへてしまつて、しばらくはポーツとなつてゐたが、するとまた、今度は、そのやうにしてうろたへてゐる自分といふものが、なんともただならぬものに思はれて來てハツとなると、いそいで志氣太のはうを見た。

すると、志氣太は、

「あはは……そんなつまらぬことをクヨクヨと考へてゐたんぢや、ちよつと癒りませんね」

最後の患者を相手にしながら例の大きな聲で話してゐたが、やがて、患者が出て行くと、時計を見ながら、

「おや、もう正午になるな」

眩いて立ちあがり、大きなノビをひとつして、そのまま千尋のはうは振り返りもせず、ノシノシと廊下へ出て行つた。

志氣太さんは大嫌ひ

晝の食事をすましてから、志氣太は裏庭へ出て、庭木の新芽にとまつてゐる虫をとりはじめた。

この頃の、小さな日課の一つであつた。植物にも、お医者さんは必要である。虫は、どこにでもゐる。どうやら、人間の體ばかりではないらしい。植物を害する虫。動物を害する虫。人間の體を、心を、害する虫。村を、町を、日本を害する虫……

——いや別に、そんな大きな虫があるわけでもあるまい。

兎に角、虫をとつてゐると、無心になれるのである。志氣太は棒の先で、そいつを引つ張り出しては地に落とし、下駄の裏で踏みつぶした。

するとこの時、細葉の生垣の向ふで、子供を叱つてゐる母親の聲が聞こえて来た。

「お晝になつたらサツサと歸つて来るんだよ。毎日々々、そんな子供もをらん家へばつかり遊びに行つとつて……子供は、子供同志遊ぶがいい」

どうやら、松太郎の妻のお崎が、小さな息子の芳夫を叱つてゐるらしい。

松太郎の家は、細葉の生垣に仕切られて、倉松家の屋敷内にあつた。松太郎は龍樹先生の車夫であつたが、今はもつばら農耕を受け持ち、お崎は女中のゐない倉松家の、掃除や臺所を受け持つてゐた。その息子の芳夫は、今年まだ六つになつたばかりであつたが、仲々賢い、よい子供であつた。

(あの子供の將來は、見てやらねばなるまい)

そんなことを、考へるともなく志氣太が考へてゐると、

「あ、ワカセンセイは虫をとつとるのかア」

いつの間にか芳夫が、口のあたりを小さな手の甲で拭きながら、細葉の生垣の大きな穴から、體を覗かせてゐた。（この穴は芳夫が倉松家の庭へ遊びに通ふために、いつの間にか出来上つたものである）

「おう、芳坊か。はいつといで……」

芳夫は嬉しさうな顔をしながらはいつて來ると、早速虫をみつけて、

「あ、ワカセンセイ。ここにとまつとらア。あ、ここにもをらア……」

「おい、芳坊。いい子だからワカセンセイなんていふなよ」

「ふーン。そいぢや、なんちうだん？」

「さうだな……」

「小さいセンセイ——ちゆやいいづら？」

「それも、をかしいな……」

「それでも、ワカセンセイは大きいセンセイの子供づら？」

「そりやまア、さうだがな……ぢやア、たゞセンセイとかヲヂサンとかいへや」

「ふーン。そいぢや……センセイ——ちうかな」

「うん。それがいいな……芳坊は、いま何を叱られてゐたんだい？」

芳夫は、急に恥かしさうな顔をしながら、

「遊びに行つとつたで、叱られただヨ」

口をとがらして、尻あがりについてた。

「遊びに行つとつたで叱られた？——子供は遊ぶものだからそんなことで叱られる筈はないがな……それは、芳坊が、ご飯の時になつても歸つて來なかつたから叱られたんだらう」

「うん。さうだヨ」

「どこへ遊びに行つたんだい？」

芳夫は、急に黙つてしまった。

「いへないのかい？」

すると芳夫は、モチモチしながら、しばらく躊躇つてゐたが、やがて例の尻あがりでいつた。

「稲垣さまだヨ」

二

「稲垣さま？」

さう反問しながら、志氣太は（なるほど）と思つた。

さつき芳夫の母は（子供のゐない家なぞへ毎日遊びに行かないで、子供は子供同志で遊ぶがいい）と、さういつて芳夫を叱つてゐたが、なるほど、さういへば

向ひの高臺にある、地主稲垣氏の家には、子供は一人もゐない筈だ。跡取息子の務は、名古屋の會社へ出てゐるから、邸には、稲垣氏と、娘の矢奈子のほかに女中や、飯炊婆さんや、男衆ばかりだ。近所に子供なぞ何人でもゐるのに、どうしてまた芳夫は、そのやうな大人ばかりの家へ遊びに行くのであらう。ふと志氣太は、興味を覺えた。

「稲垣さんへ遊びに行くつて、毎日かい？」

だが、この頃から、なぜか芳夫の返事は、澁りがちになりはじめた。

「ううん。昨日と、一昨日とその前と、行つただけだヨ」

口の先をとがらして、尻あがりにいふ。

「あんな大人ばかりの家で、誰が遊んでくれるんだい？」

「……………」

「誰も遊んでくれないだらう」

「遊んでくれるヨ」

「誰だい？」

「矢奈子さまだヨ」

「ほう。矢奈さんがか……だがあんな大きなお姉さんちや面白くないだらう」

「お菓子をくれるヨ」

「あはは……なるほどな。お菓子をくれるか。でも、よくお菓子があるな？」

「子供がないもんだい、ハイキュウのお菓子が餘るだけなヨ」

「なるほど。ちやア、お菓子を貰つて喰べながら、歌でも聞いてゐるのだな？」

「ちがふヨ」

「ちやア、オルガンかい？」

「ちがふヨ」

「……ちやア、なにをしてるんだい」

「……はなしだヨ」

「はなし？……は、ア。お伽噺を聞いてるんだな」

「ちがふヨ」

「ちがふ？ ちやア、どんなお話を聞いてるんだい？」

「ちがふヨ」

「ちがふ？」

「わちが話すだヨ」

「わちが？ 芳坊が話をするのか？ ほほお、それは面白い。芳坊はどんな話が出来るんだ。ひとつ、聞かしてくれ」

すると芳夫は、俄然黙つてしまった。棒の先で、地面をしきりに掘つてゐる。

「おい〜。恥しがらずに聞かしてくれよ」

「それでも、矢奈子さまが、誰にも云つちやアいかん、ちゆつたむんだい」

志氣太は、いよいよ興味を覺えた。

「それはをかしいな。誰にもいへないやうな内密話などをしては、いい子供になれないな」

すると芳夫は、急に地面を掘るのをやめて、困つたやうな顔をした。

「悪い話かい？」

芳夫は黙つて、はげしく首を振つた。

「それならいへるだらう？」

「……………」

「いへなければ仕方がないな」

志氣太は、静かに腰をあげようとした。すると芳夫は、急に困つたやうに、手の甲で鼻のあたりをこすりながら、たうとういつた。

「……センセイのことだよ」

「なにセンセイ？ 学校のセンセイかい？」

「ちがふヨ。このセンセイだよ。ワカセンセイのことだよ」

三

急に志氣太の雄大な顔が、妙な皺を見せて歪みはじめた。

芳夫は、これはまた叱られるとでも思つてか、さつきまで地面を掘つてゐた棒切れを手に持つたまゝ、口のあたりをへの字にまげて、恐る恐る志氣太の顔を見上げてゐる。

その芳夫に気がついて、志氣太は再び屈み込むと、苦笑しながら云つた。

「いや、芳坊はいい子だから小父さんは怒りやアしないよ。矢奈さんに、芳坊は小父さんの悪口をいつたのか？」

「ちがふヨ、ちがふヨ。いろいろなことを、何んでもないことを、話したただけだ」

ヨ

「いろいろなこと？」

「うん。それでも、矢奈さまがセンセイのいろいろなことを訊くんだもん、しかたがないヨ」

どうやら叱られないと知つて芳夫は安心したらしく、前の元氣な様子に戻つて喋りだした。

「——矢奈子さまは、センセイのことをシキタサンといつとるヨ。毎日シキタサンは何にをしとるかつて訊くよ。そいから、ちい姉さまのことも訊くよ。ちい姉さまのことは、チヒロサンといつとるヨ。シキタサンはチヒロサンと仲がいいかツちうことも訊いたヨ」

志氣太は、なんとも複雑な皺を顔に浮べて、黙つたまゝ、もはや芳夫から何にも訊き出さうとはしなかつた。

——どうやら志氣太は、この妙な訊問の結末にいさゝか呆れながらも、そのやうなことを芳夫からあれこれと聞きほじらうとしてゐる矢奈子の心理状態といふものを、はやくも診察しはじめたらしい。

ふと、志氣太は、こないだ家に歸つて來た時、門の前で、チラリと見た彼女の後姿——派手な髪に、眼のさめるやうな紅葡萄酒色の羽織をひるがへしながら、こちらのほうは振り向きもせずにサツサと街のほうへ出て行つた彼女の後姿を、苦笑と共に思ひ出した。

子供は、無心につゞけた。

「——そいから、矢奈子さまはチヒロサンは好きだが、シキタサンは大キライだといつたヨ。そいでも、矢奈子さまは、いつも、センセイのことばかり訊くヨ。妙だな……」

「おいおい。もういい」

志氣太は立ちあがつた。

「芳坊はいい子だから、もうそんなつまらない話をするぢやない」
「それでも」

「いや、子供が、そんな大人の話をするものではないよ。そんな大きな人のところへばかり遊びに行つてると、よい子供になれないよ。もうそんなところへ遊びに行かないで、子供同志で遊びなさい」

「それでも、お菓子してくれるだもん。お菓子を貰ふだけならいいづら」

「いや。お菓子なら、小父さんが、いいものをこしらへてやるよ」

「センセイが？」

「うん。お菓子よりも、もつといいものをこしらへてやるよ……さアおいで」

志氣太は、芳夫を連れて、庭傳ひに薬局へ廻つた。

診療室では、千尋が机に向つて、どうやら、二三日前に志氣太が頼んで置いた

患者の病別統計表をこしらへてゐるらしく、しきりにペンを動かしてゐた。

志氣太は、その方へは聲をかけないやうにして薬局へはいると、シロツブをこしらへて、受附の小窓の前で背伸びをして待つてゐた芳夫へ、渡してやつた。

桃色の液體のはいつた小さな薬壺を、まるで鬼の首でも取つたやうに振りかざしながら、芳夫は表へ飛び出して行つた。

四

ヒラリと蝶のやうに身をひるがへして、バスから降りた矢奈子だつた。

美しい顔をすこし反らすやうにしながら、手提げを胸横へかかへ込み、ぜつたいに脇目をふらす、村道を我家の方へサツサと歩いて行く。

——もしも、こんな時、たとへ彼女の行手に、どのやうに偉大な人物が現はれようとも、彼女は決して、横を向かないであらう。

尤も、彼女の方では、どこにどんな人が立つてをり、誰が自分の方を見てゐるか——といふやうなことは、横を見なくともちやあんと知つてゐるのであるが……。

——矢奈子はいま、富橋の街から、村へ歸つて來たところである。

彼女は、三日に一度くらの割合で、必らず富橋の街へ出掛けて行く。東京の女學校で、お茶も華も、一と通りは修めたのであるが、家の中にブラリとしてゐては、若さと美しさを持てあましてしまふので、かうして更に（臨戦下婦道の鍊成）とやらをなすべく、街へ出かけて行くのであつた。尤も彼女は、お華やお茶の先生のところへばかり寄り寄るだけではない。或る時は洋裁店や化粧品店で、たいへん立派な批評家になつたり、また或る時は、美容院の待合室で、かなり永い間相客と無言の睨み合ひを試みたり……なかなか忙がしい。

だが、さういふ蝶のやうに愉しげな生活にもかかはらず、近頃彼女は、甚だ愉

しまない。

——憂鬱であつた。

それは、いままで彼女の周圍にあつて、彼女と同じやうに生活してゐた仲間たちが、いつの頃からとなく、一人消え、二人消えして、だんだん少くなつて行くからであつた。もとより彼女にも、さういふ風にして、彼女と同じやうな生活から消え去つて行く顔馴染たちが、どのやうな新らしい生活にはいつて行くのか、知らないわけではなかつた。

富川の町の近くへ新らしく出來た、軍關係の大きな工場へは、もうずつと以前から、富橋市の附近からだけでも、校長先生のお嬢さんだとか、某市會議員のお嬢さんだとか、市内一流の或る呉服店の令嬢だとか、某官衙首腦の愛嬢だとか……等々、なんにんもの立派な家庭のお嬢さんたちが、他のもつと多くの新らしい女性たちといつしよに通勤し、纖手を作業衣に包んで黙々として、勇士のあとか

ら戦争に参加してゐるのだつた。

矢奈子の周囲から、二人三人と消え去つて行く仲間たちの大部分も、さういふ新しい生活に自から進んで参加して行くのであらうことは、彼女にも判つてゐた。が、さういふ現象が、どういふ意味と價值を持つてゐるかといふことを考へるよりも先に、まづ彼女は、そのことにいひ知れぬ壓迫を覺えた。重々しくのしかつて来るやうな壓迫だつた。彼女は、心の中で、その壓迫と戦つた。が、壓迫は、なかなか退却しない。すると彼女の氣持は、妙にコヂれて、一種軽度の神經衰弱症狀を呈しはじめた。

——ぜつたいに横を見ないでツンとすまして歩くといふ、以前からの彼女の習慣の中には、最近さういふ反撥的の神經症狀の影響も、どうやら幾分加味されはじめてゐるらしい。

で、今日も彼女は、街から歸つて來ると、誰に喧嘩を賣られたわけでもないの

に、獨りでブリブリしながら、村道を歩きはじめたのであるが、邸の高臺に通ずる曲角の近くまで來ると、ふと彼女は、始めてその顔に微笑を浮かべながら立ちどまつた。

——倉松醫院のはうから、例の芳坊が、ブラリブラリ歩いて來るのである。

五

千尋にでも編んで貰つたものであらう、中細糸糸の腕白さうなジャケツを着てそのポケットへ兩手をつツ込んだまゝ、なにやら得意さうに、ニヤニヤと笑ひながら、芳夫は近づいて來た。

「芳つちやん。遊びに來ない」

矢奈子は、他のどんな男性にも絶對に見せたことのないやうな、至極開放的な微笑に顔をほころばせながら、芳夫へ呼びかけた。

すると芳夫は立ちどまつて、口先をつき出すやうにしながら、

「いやだヨ」

といった。

「あら。どうして?—お菓子をあげるわ」

「いらないヨ」

「—まあ。どうしたの?」芳夫ちゃん。あんた、お菓子が大好きぢやなかつた?」

「好きだヨ。そいだけど、お菓子より、まつといいものがあるヨ」

芳夫は、急に、さつきの得意さうな顔になると、ポケットから、いままで隠してゐた片手をおもむろにとり出した。その手には、桃色の液体が半分ほどはいつた小さな薬壺が、いかにも大事さうに握られてゐた。

「あら。それなあに? お薬?」

「ン、ちがふヨ。赤いミカンスイだヨ」

「まあ。赤い蜜柑水?—誰れに貰つたの?」

「センセイだヨ。ワカセンセイだヨ」

「志氣太さん?」

矢奈子の眼が、キラリと光つたやうだ。

芳夫は、大きくうなづく、急に得意さうに、薬壺をかゝげて矢奈子の側へ寄添ひながら、

「もうこいで、二ハイめだヨ—センセイは、毎日一バイづつくれるヨ。ピンを大事にしとりや、いつまででも、毎日一バイづつくれるげなア—」

芳夫は、壺をさしあげるやうにしながら、

「これ見ん。ここんところに、スヂがついとるづら? このスヂまで、一つづつ呑むだヨ」

いかにも、うれしさうだ。

「まア。ちやア、志氣太さんは、これから毎日、その蜜柑水を、芳つちやんにこしらへてくれるの？」

「ふん。そいでで、まアこれからア、ヤナコサマにお菓子を貰はんでもいいだヨ」

「まア。そんなこといはなくたつてお菓子はお菓子で、貰ひに來たつていいぢやないの？ おいしいパンをこしらへたげるわ」

「——ン、そいでで、ヤナコサマは、センセイのことを訊くもん」

「あら——」

「センセイは、子供がそんな大人のはなしをしちや、いかんちゆつたヨ」

「まア、この子——」

矢奈子は、急に顔を起した。狼狽が、彼女の頬をポツと染る。が、すぐに立ち直つて芳夫を軽く睨みながら

「芳つちやん。ダメよ、あんたそんなこと志氣太さんにお喋りしちや。第一、あたしなにも、志氣太さんのことなど、訊きやしないぢやないの。志氣太さんのことなんて少しも興味ないもの。芳つちやんは、好きだけど……」

「ヤナコサマは、センセイが嫌ひ？」

「——さうよ。あんなひと大嫌ひさ！」

矢奈子は、云ひ捨てて、前よりいつそ不機嫌にクルリと向き直ると、そのまま脇目もふらず、坂道のはうへあるきだした。その後姿を見送りながら、薬壺を提げたまゝ、芳夫は首をヒネつてゐる。

六

高臺の森に沿つて、坂道を曲り登ると、昔の旗本屋敷みたいな、古い長屋門があつた。その門の中の、土蔵の見える廣い前庭には、角のすりへつた伊豆石の敷

石道が、大きな母屋まで續き、母屋の玄関をはいると、子供の野球でも出来さうな、廣々とした土間になつてゐた。

その土間の杳脱へ、投げ出すやうに草履を脱ぎ捨てると、

「あ、お歸りなさいまし」

迎へ出る女中には言葉もかけず、長い黒光りのする廊下に風を捲き起すやうにして、矢奈子は不機嫌に離れの自室へ引揚げて行つた。

ビシヤリと思ひ切り音を立てて、ここばかりは明るい新築の部屋の障子をあけると、手にしたハンドバックを床の間のはうへドサリと投げ出し、つづいて、陽春の外出で暑くなつたのであらう、羽織を引メくるやうに脱いで窓のそばのオルガンの上へサツと投げつけ、返すその手で、しどけなく後ろへはねあげた足から足袋をムシリ取つて今度は部屋の隅のミシンのあたりへそいつをポンポンと投げつけると、そのまゝ崩れるやうに机の前へ横坐りになり、兩肘をつき、その上へ

ほてつた美しい顎をのせて、さて——怨愁めんめんたる視線を、窓越しに空の彼方へ投げかけるのであつた。

と、その耳へ、

「あははは……まつたくじやよ、あんたのいふ通り、そんなことは私慾を考へたりして出来ることぢやアない。どこまでも村のため、土地の發展のためを思つてこそその仕事ぢやよ……」

中庭の植込越しに、母屋の座敷のはうから、どうやら客と話してゐるらしい父親の兵衛の聲が聞えて來た。

「——兎に角、見なされ。富川の町にしろ、馬窪の町にしろ、あの大きな工場が出來たお蔭で、どんどん發展して、いまにも市にならうとしとるし、また、富橋にしてもぢや、工場はおろかやれ港を擴張しようの、運河を掘らうのと、なかなかの活氣を見せとるちうに、ひとり青柳村はぢや、相も變らず舊態然としてサツ

バリ發展しよらん。幸ひ、土地はあるんぢやから、全くこゝでひとつ頑張つて、なんでもいゝから大きな工場でもデンと持つて來んことにやア、この新らしい時勢にとり残されちまふわけだテ。——いや。兎に角、あんた方がそこへ氣がつけば、結構なことぢや。ようがす。工場のはうの物色だの、縣會議員を通じての高等政策だのは、この稻垣が引受けませう。あんたはあんたで、村長のはうの話を進め、その、あんたがたの希望通り、先進町村の視察をするなり、なんなりしてひとつ活潑に活動を始めなされ」

(うるさいつたらありやしない。いつたい客は誰だらう?)

——父の言葉使ひから見ても、どうやら相手は村の者らしいが……。

矢奈子は舌打しながら、首を伸ばすやうにして、庭のはうを見た。

すると、利休燈籠の火ブクロの窓から、洲崎といふ村會議員の顔がチラリと見えた。が、その顔は、すぐにお辭儀をして、どうやら歸つて行くらしい。

間もなく、飛石傳ひに庭下駄の音がして、後手を組んだ兵衛が現れた。がすぐに彼女のほうに氣がつくと

「おう、矢奈。歸つたか」

けれども、矢奈子が、わざと横を向いて黙つてゐると、兵衛は何氣なくブラブラと行過ぎかけたが、ふとまた立ちどまつて

「ム。さういへば、倉松の若が歸つとるさうぢやな？」

何氣なげに話しかけた。

矢奈子は、窓の障子をピシヤリとしめた。そして、中から答へた。

「知りません！」

—

ピカピカと光る新らしい自転車に乗つて、志氣太は畑の中の道をはしつてゐた。たださへ躰が大きなところへもつて来て、まだ充分に練習が出来てゐないので腰つきもハンドルを持つ手許もなんとなく安定感にとぼしく、平然たる顔つきはしてはゐても、あまりたのもしい乗りぶりとは思はれなかつた。

——夕方近くの、往診の歸りであつた。

あたりの春は、もうすつかり成熟してゐた。

麥はいよいよ青く、道ばたの土堤にも田の畔にも、たんぼばやれんげの花が咲

きみだれ、吹く風は甘く暖く薫つてゐた。畑には、いたるところに村びとたちが西陽をうけながら麥を踏んだり土を着せたり、働きつゞけてゐた。男もゐれば女もゐた。若い者はすくなかつた。

道ばた近くの畑にゐる人たちは、志氣太の姿をみとめると、仕事の手をやすめてはていねいにお辭儀をした。すると志氣太は、その都度、ハンドルをしつかり握つたまゝ、ほとんどそのほうは見向きもせず、だが聲だけは元氣で、

「やあ、やあ」

と挨拶した。

——なにしろ、まだはじめて間もない自転車で、わき見をしながらはしるなどといふ藝當は、とても出来ないのである。

倉松醫院の物置には、一臺の古ぼけた人力車がしまつてある。いふまでもなく會つての老龍樹先生の愛用車であるが、けれども、この俤たるや恐るべきしろも

ので、幌布はすつかり羊羹色にあせてしまひ、布地のしようもぬけてところどころに穴があき、定紋入りの腰板も漆がはげ落ちてポロポロになり、おまけに、肝心な二本の梶棒が根もとのところで折れてしまつてゐる。人力車といふよりは、俵の残骸とでもいふべきしろものであつた。で、この俵に、倉松龍樹先生が、まだ病を得て再起不能におちいられる以前、松太郎に梶棒をとらして、村道をゆらゆらと應診に廻つたものであるが（それはまつたく、幌の頭をゆらゆらと左右に揺りながら、あるいて行くのであつて、決して疾つたことはなかつた。なん十年といふ永いあひだ、村びとたちは、この俵が畑の中の道をゆらゆらとあるいて行く姿を毎日のやうに見かけたものであるが、けれども、いまだ會つて、誰一人としてこの俵が疾つてゐるのを見た者はないのである）——で、そのやうに、むかし懐しい青柳村の名物の人力車が、いま、倉松醫院の倉庫の中に、空しく残骸を横たへてゐるについては、これには、志氣太もいさゝか、その責任の一斑を擔つ

てゐるのだつた。

それは、志氣太が青柳村へ歸つて來てから、まだ間もない或る日のことであつた。

志氣太のところへ、はじめて應診の口がかゝつて來た。患家は、志氣太の家からかなり離れた、村はづれの或る農家であつた。

「松太郎や。松太郎や。俵の用意はいゝかな。志氣太が應診に出かけるぞよ！」
藤椅子の上から、いつになくいきいきした調子でかう呼びかけた龍樹先生の聲に、待つてゐましたとばかり松太郎は、物置の中から蜘蛛の巣だらけのその俵をひっぱり出して來た。

玄關に立つて千尋の手からカバンを受けとつてゐた志氣太は、とつぜん現れたその人力車を見て思はずチヂチとなつた。

子供の頃からの思ひ出にある懐しい俵ではあつたけれど、まさかその俵が、い

ままで無事に永らへてをり、しかもこれから以後、自分の乗用車として用意されようなどとは、夢にも思つてゐなかつた志氣太である。流石の彼も、しばらくはあいた口がふさがらなかつたが、けれども當の松太郎はそのやうなことには頓着なく、バタバタと蜘蛛の巣を拂ひ落すと、有無をいはず、志氣太を車上に乗せあげてしまつたのだ。

二

うららかな春の日の午後であつた。

ゆらゆらとかげろふの燃えるのどかな村道を、志氣太を乗せた人力車は、羊羹色の幌を左右に振りながら、のんびりとあるいて行つた。車上の志氣太も、梶棒の松太郎も、二人とも知らなかつたけれど、いつのまにかその俵の幌の屋根にもゆらゆらとかげらうが燃え立つてゐた。

「早いもんでござんすなんし。ついこないだまで、若先生が、親先生のお膝にはさまつて、わつしがかうしてお引き申したと思つとりましたに、はいもうこんなに、重くおなりになりましたんで……」

「——うム」

「いゝお天氣でござんすなんし」

「——うム」

「いよいよ大きな戦争になつて、東京でも大へんでござるませうなんし」

「——うム」

「兵隊さんがたも、さだめし御苦勞なことでもござるませうなんし」

「——うム」

なんと話しかけられても「うム」「うム」である。

志氣太は、すつかりくさり切つてゐた。

——これでは、どうにもものろ過ぎる。のろいばかりではない。動くにつれて、たえず俵のそこらあたりが、今にもバラ／＼になつてしまひさうに、ギイ／＼と軋みつづけるのだ。

トンボが一匹、飛んで来て、松太郎の笠にとまらうとするのか、しきりにぶんぶんやりはじめた。

「おい。もう少し、はやくやれないか。患者は待つてるんだ」

「へ？」

「もう少しはやくやれないかといふんだよ」

「へ？ 俵でござんすか？」

意外なことを訊かれるものだ、といったやうな顔つきで、松太郎はふりかへつた。

「疾らせるので、ござんすか？」

「さうだよ、もう少し早くしなきや。——患者は待つてるだらうからな」

すると松太郎は、向ふをむきなほつて、相變らずゆつくりとあるきつづけながら、静かに首をふつた。

「若先生。そいつはおよしなせえまし。——みぐるしい。……なにしろ、この俵は、これでもう、二十年がとこ、いち／＼も疾つたことはござるませんでなんし。親先生は、お疾りになることが大きらひでござんした。(俵は疾らせるものではない。醫者ともあらうものが、疾つたり飛んだりしてはみぐるしい)——いつも、さうおつしやつておるでした。それだで、自轉車だの自動車だのいふものは、ムシズが出るくれえおきらひで(あれは、稼ぎ人の乗るもので、まことの醫者の乗るものではない)とさう、いつもおつしやつておるでしたよ。——まア、若先生も、さうなさつたはうが、ご立派でござるますよ。ほら、ご覽なせえまし。あそこでもここでも、村の衆たちが、先生さまのお出ましたとばかり、あゝして

コックリ〜お辭儀をしとるぢやござんせんか。村の衆たちは、この、先生の傳を見ると、みんな、なんともいへん、心強い氣持になるんださうでござんしてなんし……」

志氣太は、思はず苦笑した。

なるほど、畑に働いてゐる村人たちは、この悠揚として迫らざる人力車が、久し振りに出現したのを見て、いさゝか心強い氣持に或ひはなつたかも知れないけれど、待つてゐるはうの患者にとつては、たまるまい。

もとより、志氣太といへども、そのやうな龍樹先生の、一種の風格ある心境といふものが、わからぬわけではない。また、かうして、追はず迫らず、悠々としてうごきつづける車上にあつて、うららかな春の野はらを眺めながら、(なに。病氣なぞといふものは、醫者がジタバタしたところで、どれほどのことをなし得るものでもない)なぞとうそぶく氣持といふものも、まんざら判らぬわけではない。

が、けれども、志氣太の若さと、誠實と、もりあがる仕事への意慾とは、どうしても、この松太郎の人力車のスピードを、黙認することは出来なかつたのだ。

「おい、親爺は親爺、僕は僕だ。兎に角、なんでもいゝからもう少し急いでくれ。疾るんだ！」

たうとう志氣太は、聲を高めて、嚴命をくだした。

三

倉松醫院の人力車が、二十年ぶりに疾り出した。

さいしよのうちにはなんのかのといつて、兎角松太郎の足もしぶり勝ちであつたけれど、それでもやがて疾り出した。車體からは、いつさうはげしくギシ〜と軋みをあげ、羊羹色の幌をいちだんと振りたてながら、はる風を切つてきつそうと疾りはじめた。

志氣太は、満足であつた。

けれども、松太郎は、たいへんであつた。

みるみる額も背中も汗に濡れあがり、五丁も疾らぬうちに、顔色はすつかり蒼ざめ、咽がゼイゼイ鳴りはじめた。

——思ふに、いままで倉松醫院の人力車が、いつかうに疾らなかつた理由の中には、龍樹先生の風格ある心境によるものばかりではなく、どうやら、その俵のガソリンの関係もあつたらしい。

「若先生、ハア……ちよつと、一服やらして貰ひますで……」

そろそろ村はづれの、患家に近いあたりまで辿りついた時だつた。喘ぎ喘ぎ、それでも必死にかけて來た松太郎は、小川の橋へ通じる小さな坂道の途中でたうとうピツタリ停まつてしまふと、タタ／＼になつた體を片肘で梶棒へよりかけるやうにしながら、もう一方の手で、腰の手拭をとりあげ、顔ぢうの汗を拭き

まわさうとした。

と、その時だつた。

とつぜん、なんとしたことか松太郎の體が、梶棒によりかかつたまゝフハリと宙に浮きあがつた。

「あッ。な、なにをッ、若先生！」

飛んだ不覺で、足をバタ／＼やりながら、思はず叫んだ松太郎の聲に、ついうつかりうしろへもたれて、ウツラ／＼と居睡りしかけてゐた志氣太は、おどろいて眼をさました。見れば、いま正に俵は、うしろへデングリかへらうとしてゐる。咄嗟にハツとなつて、體を前へ投げ出すやうに屈めた。すると俵は、今度はガク／＼と前のめりになり、いきほひ餘つて松太郎の手をはなれた梶棒は、ダツとばかり地面に激突するやいなや、ポキンと音高く根もとから折れてしまひ、弾みをくらつて投げ出された志氣太の體は、松太郎の體といやといふほどぶつかりながら

ゴロ／＼と道の上へころがつた。

「それご覧なされ。それだではぬこつちやござんせぬ。この俵ア疾つたりするやうなゲビた俵ぢやねえですからなんし……」

折れちぎれた梶棒を拾ひあげながら、松太郎はいまにも泣きだしさうな、世にも情けない顔つきで、うらめしさうに志氣太へいつた。

梶棒のとれた人力車といふものがどのやうなものであるか、ご存じの讀者はすくないであらうが、それは全く、どうにもならないしろものであつた。人間が乗れないことなどいふもおろか、それ自身を立てて置いてをくことさへ出来ないのだ。

幸ひ、そこはもう、患家にほど近いところであつたので、志氣太は、尻をさすりながら、あるいて行つた。そして診察をすますと、再び同じやうに、長い村道をトボ／＼とあるいて歸つたのであるが、その志氣太のうしろから、折れた梶棒

を俵に積み、その俵の背板のところを後からしつかりつかましながら、まるで、なにかふしぎな舶來の乳母車でも押しに行くやうな恰好で、ヨタ／＼と運んで行く松太郎の姿を、畑の村びと達は、しきりに首をかしげながら見送つてゐた……

——さて、そのやうなしないで、倉松醫院の人力車は、以來、見るもむざんな残骸を、物置の中へ横たへてしまひ、その俵の代りほ、志氣太は、新しい自轉車を一臺、買入れたのであつた。

その問題に關して、龍樹先生が、もはやなんの感想も洩らさなかつたことは、いふまでもない。

四

今日もうらかなな天気であつた。

おつかなびつくりの腰つきでベダルを踏みつづける志氣太の背中には、暖かな

西陽がボカボカとあたって、腋の下から小汗がにじむほどであった。

日和つづきで白く乾いた村道には、こまかなバラツキがいちめん敷きつめてあり、ともすると自轉車の車輪がその中へ取られさうになつた。志氣太はハンドルをしつかりと握んだまゝ、馬車うまみたいにわき見もせず、いつしようけんめいペダルを踏みつづけた。

両側を桑畑にはさまれたところまで、志氣太の自轉車が來たときであつた。

とつぜん、一方の桑畑の中から、まッ黒な土の塊りみたいなのが、サツと鈍い弾道を描いて、すぐ眼のまへの道の近くへ落ちて來た。

志氣太は、思はず、ハツとなつた。

と、ハンドルを持つた手許がうつかりよろめいて、自轉車の前輪が、道路の隅の、まだよく踏みかためられてないバラツの中へ突入して、あつといふまに、片脚をついてしまつた。

道の近くの畑の隅へ、ドサリと落ちて來た黒い塊りは、まだこぎぬかれたばかりの、なまなましい桑の根株だつた。

畑の中には、カーキ色のきたないズボンにゲートルを巻いて、上半身を素裸にした鉢巻の男が、向ふをむいたまゝなにやら妙な機械みたいなものにしがみついて、いま正に、もう一つの桑の根株をこぎぬかうと力んでゐるところであつたが、ふと、はげしい勢ひでバラツの中へ喰ひこんだ志氣太の自轉車の氣配に氣づいたらしく、急に身を起すと、體をネヂまげるやうにしてこちらを振りむいた。

定森喜惣——だつた。

——いつか志氣太が、龍樹先生から會見をすすめられてゐた、あの男だつた。陽焼けのした淺黒い皮膚といひ、大粒な眼玉といひ、顔のまん中に盛りあがるやうに發達した頬骨といひ、以前とすこしも變らない顔つきだつた。

あまり裕福な農家の息子ではなかつたが、子供の頃からわりに成績がよく、藝

郡の農學校を卒へると、かなり父親に無理をさして三重の高等農林へ進み、そこを卒業してから二年ばかり縣の技手をしてゐたが、なんと思つてか途中からその職をなげうち、以來、青柳村へ歸つて來て農會の技術員をしながら、村人達の相手になつてゐるといふ、くちさがない村雀の言葉かりれば、

(一風變つた男)
であつた。

志氣太よりは二つばかり年下で、家も少しはなれてゐるので、あまり親しい口をきいたことはなかつたが、互ひの顔や履歴は、よく識り合つてゐる間柄だつた。

「やア」

「これは」

どちらからともなく、聲がかつた。

「倉松さんぢやアないですか。お歸りになつたんださうですね——」

喜惣はさういつて、鉢巻をとりながら挨拶した。

志氣太は、それに答へるやうに、自轉車を道傍に立てかけた。

「ご精が出るね。役場のはうはもう濟んだのかね？」

桑畑へはいつて行きながら、志氣太は喜惣へ聲をかけた。

「はア。けふは、役場は休みでして……」

「あゝ、日曜だつたな。——それで、百姓といふわけだね」

「まア、そんなわけで。百姓には日曜ありませんでね」

喜惣は手拭で、顔の汗をふきながら、素朴な親しみをこめた眼で志氣太を仰ぐやうに見た。

「桑をこぐのかね？」

「はア」

「で、あとをどうするのかね？」

「米を作ります」

「米？ こんな高い畑で、水が引けるかね？——あ、陸稻だな」

「さうです。冬になれば、麥をまきます」

答へながらも喜惣の眼の中には、しだいに、人懐っこさうな色が浮びはじめて来た。

五

太い木の棒を組んでこしらへた妙な機械みたいなものに眼をやりながら、志氣太はいつた。

「これで、桑の根をこぐのかね？」

「はア、テコを應用して、自分で勝手に工夫した道具です……倉松さんは、もうこれから、すつとお家ですか？」

「あゝ。親父も年をとつたからね。……この桑畑を、皆こいでしまふのかね？」

「道からこつちだけです」

「——養蠶も、全然ダメなわけぢやアないんだね」

「さうです。養蠶でも、製糸でも、それ自身は立派な産業ですから……まア、再出發といふわけです」

テコの長く突出してゐる太い棒へ、腰を休ませるやうにもたせながら、喜惣はそれから、いままでの蠶糸業が、ほとんどアメリカ市場に依存してゐて、一國の産業としての自主性を持つてゐなかつた爲めに、特に製糸業などはいやでも投機化してしまひ、業者の中には相場の上り下りにばかり血眼になつて、製品を倉庫から出したりひつこめたりしてゐたやうな人達が多かつたことだとか、しかもその製糸業が、従来はこの地方の産業界を代表してゐたほどの盛大なもので、このへんの百姓で養蠶を主要な副業にしてゐない者は殆んどないくらいありさまで

あつたから、その百姓がまた、製糸業の浮沈の影響をそっくりそのまま、反映して、泣いたり笑つたりしつづけたといふやうなことや、それからまた、さういふ不健全な他力本願の経済が、こんどはいよいよ自分の國の需要を中心とした新らしい健全な經濟に移ることになったのだから、いまのこの製糸や養蠶界の不^ま振といふものは、今までの時代にアメリカ市場の影響を受けて、時どきやつて来たやうな不振とはまるきりタチが違ひ、同じ腹痛でも新らしい子供を生むための陣痛であるから、自分達は大きな希望を持つて、桑園の整理と食糧の確保にあたつてゐるといふやうなことを、眞面目な、朴訥な口調で、ふしぎな情熱をさへ見せながら、手短かに志氣太へ説明するのだった。

ふと、道路のはうに、人の氣配がした。

小さな風呂敷包みを片手に抱へて、サツパリした紺緋にメリンスの帯をしめた頬の赤い一人の娘が、やゝ羞らひながら、桑畑のはうへやつて来た。

「なんだ、清ぢやないか。なに用だ」

喜惣が、氣づいて、振返つた。

娘は、いつさう羞らひながら立ちどまると、志氣太のはうへかすかに挨拶した。

「私の妹です。——富川の工場へ通つとります」

喜惣は、娘のはうへ近づいて行つた。

二人は、何やらボソ／＼話してゐたが、そのうちに、羞かしさうにためらふ娘の手から、喜惣は風呂敷包みを取りあげやうとした。娘は渡すまいとした。

「なに、構はんよ。倉松さんにもあげるがいゝ」

たうとう喜惣は、娘の手からムリに風呂敷包みを取りあげると、娘の先に立つて志氣太のはうへやつて来た。

「いま、工場から歸つたところが、ちやうど親戚の者が、珍らしいものを持つて来たからつて、届けて来たんですよ。ひとつ、倉松さんも、いかがですか」

いひながら風呂敷包みを解いて、竹の皮をバサ／＼やりながら、中から異様な食物をとり出した。

手の平くらゐの大きさに飯米をネリかため、味噌醤油をつけて焙つた奴を、太い竹の串へ刺したといふ不思議なたべもので、咄嗟にはなにやら志氣太にも思ひ出せなかつたが、

「どうです、珍しいでせう。五平餅ですよ」

いひながら、その中の一本をニュツと眼の前へ突き出した喜惣の言葉に、志氣太は思ひ出した。

子供の頃によく食べたことのある、この地方から信州方面へかけての獨特のたべもので（五平餅）といふ名前にもなつかしい響きがこもつてゐた。

「どうです、見かけは悪いが、味は昔とかはりませんよ。ひとつやつてみて下さる」

妹の困つたやうな顔には頓著なく、喜惣はたうとう、五平餅を一本、志氣太の手へ押しつけてしまつた。志氣太は、あつけにとられた顔つきで、その異様に大きな五平餅の、味噌だらけのみにくいツラをながめながら、ふと、しみじみとした感懐をおぼえた。

六

ここから五里ばかりの奥地、鳥居強右衛門で有名な永篠古戦場の少し手前、武田信玄が鐵砲で打たれた村の隣りに、古城町といふさ／＼やかな城下町がある。その町に、さらに奥地の津俱といふ銀山のある村から、打つて出た笹木光造といふ昔の文士の、身内にあたる立派な醫師がゐて、志氣太がまだ中學生の頃、龍樹先生に連れられて、古城町にある松ヶ淵といふ見渡すかぎり松ばかりの公園へ遊びに行つた歸りに、その醫者の家で、たしかこの五平餅と同じくらゐに、異様に大

きな五平餅を御馳走になつたことがあつた。

(五平餅)と書くのか(御幣餅)と書くのか、どちらがほんたうかは志氣太は知らなかつたけれど、なんでも五平餅は、この地方も奥地へ行くほど本物を食はせるといふことで、その古城町の醫師の家で御馳走になつた五平餅も、志氣太が子供の頃に青柳村で馴染んだやうな五平餅などとは違つて、大きさもすつと大きくびつくりするほどの小判型で、味つけも味噌などではなく、クルミや蜂の子のはいつた獨特の醤油汁をつけた、みるからに野趣に富んだなんともいへないおいしい食べ物であつた。

喜惣から押しつけられたとてつもなく大きな五平餅のツラを眺めながら、はからずも志氣太は、その古城町の醫師の家で、同じやうな五平餅を御馳走になつた時のことを思ひ出したのだつた。

なんでも、その醫師の家では、毎年一回づつ五平餅のささやかな會をすること

になつてゐたとかで、ちやうどその時に訪ねて行つた龍樹先生と志氣太は、早速その、ひなびた催しの中へ招かれたのであつた。座敷のまん中に切りひらかれた圍爐裡の周圍には、志氣太達のほかに、醫師の碁仇であるといふその町の若い町長さんや齒醫者さんなどの先客がズラリと車座になつて、さかんに溢茶をすすりながらイナゴの佃煮を頬張つてゐた。チンチンと炭火のおきた圍爐裡のふちには、既に大きな孟宗の竹串に刺されて、クルミや蜂の子のはいつた醤油汁をつけられた五平餅が、何本もズラリと並べられ、主人の手によつて、うまさうな香りを部屋いっぱいにもらせながら焙られてゐた。適當に焙られると、客人達は勝手にそれを取りあげては、竹串の柄のところを手に持つて頬張つた。頬張つては茶をすすり、茶をすすつては五平餅を頬張つた。志氣太も皆と同じやうに、一本すくなくとも一合や二合の米は握り込まれてゐさうなその巨大な五平餅の串の柄を持つて、恐る恐る頬張つたのであるが、その五平餅のうまさといふものは、いま

だに忘れることの出来ないほどのものであつた。おどろいたのはその味のうまさばかりではない。そのやうに大きな五平餅を見たのも、志氣太には生れてはじめてであつた。それはまったく巨大なしろものであつた。顔のところまで持つて來ると顔が隠れてしまひさうな大きさであつた。客人たちはその巨大な五平餅を、串からポトリと取りおとさないやうに、巧みにへりのはうから頬張つては茶をすすり、茶をすすつては頬張りながら、そこはかとなない四方山ばなしに一夜をすするのであつた。一本たべるに三十分もかかり、二本もたべれば満腹になつた。尤も龍樹先生も志氣太も、それから主人の醫師も、その醫師の碁仇の齒醫者さんもみんなせいぜい二三本づつであつたけれど、どういふものかその町の若い町長さんは、たちまち七八本をペロリと平らげて、その心臓の強さには流石の志氣太もおどろいたほどであつた。……

「あ。はやくおあがりにならんと、膝の上へ落ちますよ。こいつは少し、ネリが

足らんやうですから」

横合ひからさう促した喜惣の聲に、勝手な思ひ出にふけつてゐた志氣太は、やつとわれにかへつて、いそいで手に捧げた五平餅のはうへ顔を持つて行くと、大きな口をあけてその一角にかちりついた。

「——それに、こいつは、大きさは奥地の本物並ですが、味つけは醤油汁でなくて味噌ですから、おとしたら大へんですよ。……どうです？ 味は……」

志氣太は、兩の眼を細めながら、もぎ取つた五平餅の一片を、モグ／＼と口の中でこなししてゐたが、やがて大きく首をふるると、いかにも感にたへたやうにいつた。

「うーム。うまい！……歸郷以來、はじめてふるさとの味にぶつかつたネ。あゝうまい！」

夕方近い畑の土堤に腰を下ろして、三人はモグ／＼と五平餅をたべはじめた。

麥畑には、まだあそこにもここにも、村びと達がはたらきつづけてゐた。ときどき鍬の刃先が、西陽を受けて鈍く光った。

「まア、いまでも申上げたやうなわけで、ことはたゞ養蠶に限らず、百姓の仕事全體も、いまはさういふ風に大きく變つて來はじめたのですから」

五平餅を頬張りながら、やがて喜惣が、前の話題に戻つて喋りはじめた。

「——しぜんと、百姓の苦心の中にも、いろいろと新らしい苦心も出來て來たわけですが、けれども考へてみれば、さういふ苦心は、なにも百姓だけのものではなく、商人でも、職人でも、そのほかどんな人でも、國內にある者はみんな同じやうに味はつてゐる苦心でして、しかもその苦心といふのが、いはば、新らしい

子供を作り出すための生みの苦しみでして——大きな夢を現實にたたかひとるための苦心なんです。考へてみれば、これくらゐ張りあひのある、希望にふくらんだ苦心はないわけですから、私たちは、みんな力をあはせて、どんな困難とたたかつて、あたへられた仕事をやりとげて行かねばなるまい、とまア、考へてゐるわけですよ」

ときれときれの言葉ではあつたけれど、ふしぎなくらゐ熱ばんだ調子で喋りつづける喜惣の横顔を、同じやうに五平餅を頬張りながら、しづかなおどろきをたたへた眼差しで、志氣太はヂツと見守つてゐた。が、その眼の中には、しだいに一抹の精彩が浮びはじめた。

「さうだね その通りだね」

と、やがて志氣太が、五平餅の味噌を口のへりへつけたまゝ、大きな聲でさへぎるやうにいつた。

「——まつたく、君のいふ通りだ。いま、僕たちには、しなければならぬ仕事
が山ほどある。そして、それを、立派に仕上げて行くためには、君のいつたやう
にいろいろの困難を克服して行かねばならないわけなんだが、さういふいろいろ
な困難の中でも、まづいちばん重大な困難は、さういふわれわれの明るい努力に
普遍性を持たせ、なにをどうするべきかといふ（正しい理解）を人たちのあひだ
に押しよめて行くことだと思ふね。そしてそれこそは、どんな仕事をして行くに
しても、まづ必らず克服しなければならぬ最初の問題だと思ふ——」

「さうです。さうです」

いきなり喜惣が、聲を弾ませてひつたくるやうにいつた。

「つまり、啓蒙ですね。——まつたく、私達自身でも、まだまだ勉強しなければ
なりませんが、ほかの人たちにとつても、實際これは大事なことですよ。しかし
倉松さん。もう私達は、さういふやうなことも、はじめてをりますよ」

五平餅を口からはなしたまゝ、喜惣は眼をいきいきと輝やかせながらいつた。

「——村の翼賛壯年團の中に、二三人熱心なのがゐるましてね。さういふ連中が仲
間になつて、實は、まだ別に文化部——といふほどの洒落たものでもないですが
まア形式は兎も角として、ときどきその連中が集つては、當面の重大な問題につ
いて活潑に意見をたたかはし、その結果を、壯年團なり、翼賛會の支部なり、常
會なり、或は村當局なりへ、どしどし獻策し、はたらきかけてゐるわけなんです
がね」

「ふーン。なるほど、それはいゝことだね」

志氣太は眼をみはつた。

「で、君は、壯年團へはいつてるの？」

「はア。私は團の書記ですから……いや、なんしろ人が足りないものですから、
なんでもやらされました。農會の仕事のほかにも、役場のはうでも、衛生だとか

軍事援護だとか、いろいろ持たされてゐますよ」

「あゝ、衛生も定森君かね。そりやア僕にとつては力強い」
「いゝえ。私こそ……」

喜惣はそれから、青柳村の壯年團が、結成以來なし得た業績や、自分たちの壯年團が、決して天降りのものではなく、着物は上からこしらへて貰つたけれど、その着物の中に包まれてゐる魂は立派に自分達のものであり、しかもいま、みづからの力によつて着々と盛りあがり、燃え育つてゐる、といふやうなことを、ボツリ／＼と例の朴納な口調で語りつづけるのであつた。

「——どうも、忙しいところを、お邪魔してしまつたね」

ようやく五平餅の一本を食べ終つたのをしほに、口ばたに味噌をつけたまゝ志氣太が立ちあがつて歸らうとすると、

「あゝ、私も、ちよつと晩までに家のはうに用事がありますから、もうそろそろ

歸らうと思つてゐたところです。御一緒に参りませう」

喜惣はさういつて、妹に鎌を持たせると、例の抜根機をよいしよと力を入れて肩にかつぎ、堀返された新しい土の中へ地下足袋のあとを深く残しながら、あゝるき出した。

志氣太は自轉車を持つた。

もうすつかり沈みかかつた淡い陽射しをうけながら、パラスの道の上を、三人は並んであるきはじめた。

八

前に父から會見をすすめられて以來、志氣太は、いつかいちど定森喜惣に逢つてみようと思つてゐた。が、それが今日かうして、偶然桑畑の中で、思つたよりも早く喜惣に逢へたので、志氣太の氣持は、なんとなく弾んでゐた。

それに、互ひに識り合つてはゐても、まだあまり親しく口をきいたことのなかつた喜惣が、案外率直に、ハキハキとものをいふ態度も、志氣太には好もしかつた。

それにまた、いきなり壯年團だの何だのといふ言葉が飛出したりして、いままでさういふものが、なにかしら遠い距離のところにあるもののやうに思はれてゐた志氣太は、さいしよ、いささかめんくらつたけれども、いまかうして、その團員の一人である若い熱心な農夫と肩を並べながら近々と語りあつてゐると、現實と理想のあひだに惱んでゐる若い魂がここにも切々と感じられて、それがまた、志氣太の心を、大らかにゆさぶるのだつた。

志氣太は、政治はサツバリ知らなかつたけれども、それを輕蔑してゐるやうなをかした男でもゐるんなかつた。ただ、定森喜惣が、これからハツキリ、なにかを爲さうとしてゐる青年であることが、志氣太にはなによりも貴く思はれたのだ。

志氣太は、黙つたまゝ、なにやらひとりでうなづきながら、あるきつづけた。その口ばたには、まだ五平餅の味噌がついてゐたけれども、それには、ぜんぜん氣づいてゐないらしかつた。喜惣の向ふを、控えめなあしどりでついて來てゐる妹の清が、ときどき志氣太のその横顔を見ては、遠慮深くわらふだけだつた。

喜惣は、重さうな拔根機をかついで、しばらく黙つたまゝノシノシとあるいてゐたが、やがて、志氣太のはうを見ながら不意にいつた。

「倉松さん。どうもとつぜんで、變ですが……どうでせうか。ひとつあなたにもその私たちの（文化部）といったものの仲間になつて頂けないでせうか？」

「え」

志氣太は、軽く眼をみはつた。

喜惣は、頬骨の飛出したやうなその顔に、しづかな微笑をうかべながら、

「——なにも私たちは、團の仕事ばかりではなく、私たちの周囲を、戦ふ國の一

部分として 明るく正しく整へて行くためには、なんでも良いと思ふことはどしどしやつて行かねばならないですから、もしもあなたに仲間にはいつていただければ、それこそ百萬の味方を得たやうな氣持で、さつそく顧問に推戴しますよ」

すると志氣太は、みるみる顔ぢうに、人の好きそうなわらひをうかべながら、「それは、はいつてもいゝがね。——しかし、壯年團員でなくちや、資格がないんだらう？」

「冗談ぢやアありませんよ。そんな堅ツくるしいものぢやアありません。壯年團とは一つものであつて、また、別のものなんですから。つまり私達は、壯年團の持つてゐる組織性といったものと、私たち文化部の持つてゐる創造性といったものを、結びつけようとしてゐるわけなんです。實際、さういふ創造性や文化性といったものを失つたら、團そのもののいのちもしなびてしまひますからね。——まア兎に角、その私達の非公式の仲間へ、顧問としてはいつて下さい。もし御

承諾願へれば、私が仲間を代表して、この場で即決し、同時にこの場で、正式に青柳村文化部の創立を、宣言したいと思ひます」

志氣太は、例の雄大な顔を明るくゆがめてわらつてゐたが、やがて、ひどく眞面目クサつていつた。

「よろしい。では、はいりませう」

九

「さうですか。それはありがたい」

と喜惣は、重い抜根機をかついた肩を代へながら、しんから嬉しさうに志氣太へいつた。

「ぢやア、早速こゝで（青柳村文化部）が生れたことにします。なに、人數は少なくて、形式は貧弱なものです、あなたのやうな有力な方と、われわれの熱意と

さへあれば、どこの村の文化團體にも負けるものぢやありません。他の連中へも早速話して、喜ばしてやりませう」

「——僕はね」

と、やがて志氣太がいった。

「醫者としての立場から、この青柳村で、まづ第一になにをしなければならぬか、といふことも、いま、ポツポツ考へてゐるんだがね。そのうちに考へも纏るだらうと思ふから、また一度暇を見て遊びに来ないかね。夜なら、僕のはうはたいがい暇なんだから……」

「ありがとうございました。是非一度あがらせて頂きます」

二人は、それで、しばらく黙つたまゝ歩きつゞけた。

いままで、殆んど口もきかず横のはうを控目に歩いてゐた清が、急に立止つていつた。

「兄さん。道が違ひますよ」

喜惣は足をとめて振返つた。そこは、喜惣の家のはうへ曲る道の岐れ目だつた。

「あ、さうだ。——ぢやア倉松さん。そのうち一度、是非あがらして頂きます。

——けふはほんとはよかつたです」

「失禮いたします」

微笑ひながら清も挨拶した。

二人は並んで、細い道へはいつて行つた。

志氣太は、自転車に乗つて、村道を疾り出した。

甘い、暖かな夕風が、頬にこゝろよかつた。太陽はもうすつかり沈んで、あたりは、うるんだやうな暮色に包まれはじめてゐた。が、畑には、まだ村人たちが働いてゐた。

すつかり手入れを終つて、もう稔りを待つばかりになつた麥畑の緑と黒の美し

い縞が、志氣太の視野の中へ次々に盛れ上つて来ては、後ろへ流れて行つた。ペダルを踏む志氣太の足に、急に力がはいつて来た。

美しい縞はいよいよ速く、いよいよこまかく流れはじめた。

志氣太はその縞を、兩の眼尻の中にしつかり捕へながら、グイ／＼と力強くペダルを踏みつゞけた。

やがて村道は、富橋から富川の方へ通する廣い新道との交叉點へ近づいた。

と志氣太は、軽くハツとなつて急にブレーキをかけながら、前の方へ眼をみはつた。

麥畑の向ふに横たはつてゐるその新道の上を、異様な行列が——自轉車に乗つた夥しい人の群れが——北から南へ果てしもなく黒々とつゞいてゐるのを認めただからであつた。

志氣太は十字路の前まで来ると、自轉車から降り立つて、思はず人々の流れに

見とればはじめた。行列の人々は、皆男ばかりだつた。ほとんど誰も口をきかずに黙々と走りつゞけてゐた。

富川の工場から、歸つてくる人々であることは、間もなく志氣太にも判つた。

が、自分の生れ育つた村の中で、このやうな光景を眼にするのは、志氣太には始めてであつた。

志氣太は後ろを振り返つた。そこには、村人たちが働いてゐた。

再び志氣太は向き直つた。そこには黒々と行列がつゞいてゐた。

——志氣太は道を横切ること忘れて、つツ立つたまゝ畑の上や道の上の人々の姿を、いつまでもヂツと見つめてゐた……。

薬局の掃除をすましてカルテの整理をしてみると、玄關のはうで郵便受の蓋がコトリと小さく鳴つた。

千尋は、手をやすめて、玄關へ立つた。

郵便は、三通来てゐた。

一通は、志氣太宛の帯封で、六ヶ敷い活字のあふれた醫學雜誌。他の二通は、同じ型の封筒に、同じ字體でしたゝめた封書だったが、その字體を見て、千尋は軽くハツとなつた。

——富橋の母から、自分と、志氣太の母あてに來た手紙だつたからだ。

(まア、母さんから。何んだらう?)

めつたに手紙を寄來さない母から、しかも、自分と、志氣太の母との兩方へあてて、寄來した手紙——

千尋は、自分宛の封書の封を切らうとしかけたが、ふと、恐れるやうにその手を引いてしまった。

何故か素直に開けられないやうな内容を、その封書の中に、千尋は鋭く感じたのだ。

志氣太の母あての封書と、志氣太あての帯封とを奥へ届けると、彼女は薬局へ戻つて來て、机の前に腰を下ろした。

だが、意識は散慢になり、妙に胸騒ぎさへして、仕事は手につかない。開封しないままの母の手紙を机の隅に置いて、時どき、困つたやうな、反撥するやうな

視線を、チヲチヲとそのほうへ投げかける。

——母がなにを云つて来たのか、もう彼女には判つたやうな気がしたのだ。
それは、悲しい豫感だつた。

この前志氣太を迎へに富橋へ出た序でに、ちよつと實家へ寄つた折、母はこのごろは店の人手も追々少くなり、その上商賣も切符制になつたりして女手には何かと六ヶ敷くなつた。といふやうなことを話してゐたが、恐らくそのことに絡んで、もうこの自分にも、富橋の家へ戻つて来るやう云ひよこしたものに違ひない。

彼女は、ほとんど無意識に、そのことを母の手紙に感じ、その豫感をありありと文字に見ることに、なぜか軽い恐れと躊躇を覚えるのだつた。

すると彼女は、今度は急にさういふ恐れや躊躇を無意識に抱いた自分の心の不思議な動きといふものに、ふと氣付いて、我れにもなく狼狽しはじめた。

——何故だらう？ 何故自分は富橋の家へ戻ることに、このやうな恐れや悲し

みを覚えるのであらう？

さうだ。それは、こんなにも明るい、働く青柳村から離れることがかなしいからだ。それに違ひない。——けれど、それだけであらうか？ たゞそれだけでこの青柳村から離れることに、心の痛みを覚えるのであらうか？……

急に、千尋は、ドギマギして、汗ばんだ兩掌を、もてあましたやうに机の上へくねらした。

その時、志氣太がやつて来た。

背廣の上へ白衣をつけて、さつきの雑誌を片手に持ちながら、ノシノシと薬局のほうまではいつて来ると、千尋のうしろから、いきなり大きな聲を浴びせかけた。

「ちいさん。兄さんが還つたんだつてね。おめでたう」

「あら。……まア兄が？」

「おや。ちいさんまだ知らないのかい？——いま君が持つて来た、君の母さんからの母あての手紙に、さう書いたるよ。なんでも、とつぜん、昨日歸還になつたんだつて。部隊の交替で、〇〇までは、もう一週間も前に戻つてゐたらしいがね……」

二

志氣太の言葉に、千尋の氣持は、思はず明るくなつた。

（さうだつたのか。さういふ手紙だつたのか。それをあたしは——まア、なんてお馬鹿さんなんだらう）

千尋は、なにか濟まないことでもしたやうに、母の手紙をとりあげながら、志氣太へいつた。

「まア、そのことが書いたりしましたの。あたしのところへも母から手紙が參つて

をりましたけど、そんなこととは思はず、まだあけて見ませんでしたの」

「いや、なんにしても、兎に角おめでたい。早速、行つてあげなさいよ。仕事のはうは、僕がやるし、また母もゐるから、心配しなくてもいいからね。三日でも四日でも、ゆつくり行つて、ひとつ大いに歓迎してあげるんだね。——ふム、いよいよ、信吉君も還つたか……」

さういつて志氣太は、手にした雑誌をバラバラとめくりながら、診察室のはうへあるいて行つた。

千尋は、手紙の封を切つた。

——やはり、志氣太のいつた通りだつた。お前にも迎へに出て貰はうと思つたが、何分急な話で、充分に時間がなかつたとか、二三日都合をつけて、お暇を貰つて来てくれとかいふことが、昔氣質な母らしい文章で、したためてあつた。

千尋は、ほのぼのとした明るい氣持になつた。

廊下に氣配がして、志氣太の母の悦が、色の白い小さな顔をニコニコさせながら、やつて来た。

「おや、ちいさんのところへもお手紙がありましたね。信吉さんが還られたんですとね。おめでたいことですね。さア、ちいさん。早速仕度をなさいよ。わたしも一緒に参りますから」

「あら、小母様も？　まア、そんな御心配をかけてはいけませんわ」

「いいえ、心配なぞといふものではありませんよ。ちいさんにいつも手傳つて貰ふばかりで、こんな時のお慶びもしないなんて法はありませんからね。倉松の家として、伺ふのですよ。さア早速仕度をなさいよ」

「ぢやア小母様、かういたしましたせう。あたし、折角仕事の仕度をいたしましたから、午前中の忙がしい間だけでもお仕事をして、それからお伴いたしますわ。その間、小母様お仕度なさつて……」

すると、診察室のはうから聲がかゝつた。

「いや、構はないよ。こちらは、それより、少しも早く行つてあげなさいよ。ほかのこととは違ふんだからね」

それで、千尋は、立上つた。

お晝少し前に、悦と千尋は石渡家へやつて来た。

親戚の者も二人ほど来てゐたといふことであつたが、それももう引揚げて店の中はいつも通り落つてゐた。

「あなたにまで御丁寧にお越し願つては、ほんとに申譯ありません」と母のくすえは悦にいひ、

「お忙がしい時ですから、お前も氣をきかさねばいけなぬね」と千尋をたしなめたりした。

信吉は、二階で寝轉んででもゐたらしかつたが、姉の萬壽子に呼ばれると、ド

シドシと階段を軋ませて降りて来た。

「やア、これは。——いつて参りました。留守中は大へん御厄介になりました」
少し堅くなりながら、元氣に挨拶した。

千尋は、その陽焼けのした、丸刈頭の、着物の妙にぎこちない兄の姿を見ながら、懐しいとか嬉しいとか思ふより先に、まるで變つた人を見るやうな、軽いおどろきを覺えた。

三

悦は、信吉から、二つ三つ戦地の話などを聞くと、今度はくすりと差向ひになつて、この頃は商賣が大變むづかしくなつたとか、呉服店の經營者自身でも切符を持つて家の品物を買ふのだとか、その他、この年配の婦人たちに適はしい世間話などを暫らく交してから、

「ぢやア、ちいさんはごゆつくりね」

さう云つて引き揚げて行つた。

千尋はしみじみとした氣持で兄を見、犒ひ、慰めようとした。が、一番はじめ兄を見た時に感じたやうな、まるで變つた人を見るやうな感覺はどうしても拭はれなかつた。それどころか、實際兄は、三年前の兄とはどう見ても少し變つてゐるやうに思はれてならなかつた。何かすさまじい雰圍氣が、まだ生々しく兄の身邊に立ちこめてゐるやうにさへ思はれて、昔のやうに冗談口を聞くことも出来ないうやうな、ある種のもどかしさと距離を覺えた。

千尋が、戦地の話を訊かうとすると、
「おい、頼むからもう勘辯してくれ」

と、いきなり突ツばねたり、たつた一人だけ残つてゐた古い店員の嘉七が、店の話を持ちかけたりすると、急に顔を顰めて、

「そんな面倒臭い話は判らんな。精神だけ話してくれ。精神だけ」
などと、高商出らしくもない大ざつばなことを云つて、嘉七をまごつかせたりした。

(無理もないわ。三年間も戦地を轉々して、戦つて来て下さつたんだもの)

千尋はさう思つて、兄が経験して来た烈しい深刻な生活を、遠くの方から推し測つてみるばかりだつた。

しかし、さうかと思ふと、案外呑氣さうに信吉は、ニコニコしながら、

「おい、千尋。お前の生活はどうだい？ 青柳村は。——志氣太先生はどんな風だい？」

などと上機嫌で話しかけたり、また律儀な母から、

「いちど落ついたら、市宮の砥鹿神社様へ、お参りに行つて来なくてはいけませんね。ついでに、富川の稻荷様へもお参りしたりして……」

なぞといはれると、

「は。是非、参拜して参ります」

昔と少しも變らない眞面目さで、素直にいつたりした。

かうして、二日ばかりするうちに、千尋は、ふと或ることに氣がついた。

——自分は、いままで、兄の勞を犒ふとか、疲れた心を慰めてあげるとか、妙なことを考へて家へ戻つて来たのだが、思へば一つもそれをしてゐない。いやど
うしたなら、それをするのが出来るのか、それさへサツパリ掴めない。どんな
ことをいつても、どんなことをしても、少しも兄は嬉しさうな顔をしない。かと
思ふと、なにもいはなくても、なにもしなくても、ひどく愉しさうな顔をしてゐ
たりする。

(なんだか、志氣太さんみたいだわ)

千尋はさう思つて、ふと、軽い妬みのやうなものを覺えたりした。

しかし、それでも、千尋にとつては、充分に愉しい二日間であつた。

三日目になつて、やつと千尋は青柳村へ歸ることにした。

すると、信吉が、いきなりいひだした。

「おい千尋。俺も行くよ。倉松さんへも、挨拶しなくちや……それに、砥鹿神社、も歸還報告の参拜をしたいからな」

「まア。ちや一緒に参りませう」

千尋は、思はず弾んだ聲で答へた。

四

千尋を置いて石渡家をあとにした悦は、富橋の市内で、いつものやうに二三の必要な買物をする、晩くなつて青柳村へ歸つて來た。

その買物のことについての意見を、それから三日ばかりしてから、晝食後の居

間で、龍樹先生や志氣太を前にして、悦は、ポツリと話し出した。

（尤も、そんな小さな問題を男達の前へ持出すまでには、もう臺所で松太郎の妻のお崎を相手に、何度も繰返してからのことであらうが）

それは――

三日前に、街の或る店で買つて來た肉と、それからまた別の或る店で買つて來た果物とが、家に歸つてからハカリで吊つてみると、だいぶ目方が少くなつてゐたといふ、狐にでも化かされたやうな話だつた。

「――それはね、昔は、この青柳村の入口の、大住寺の森に意地の悪い古狸がゐて、村の人達の買物を、知らぬまに途中で抜いたり、減らしたりしたこともあるさうですが、それはまだ志氣太も生れない先の昔の話で、いまはもうそんなことのある筈はないと思ひますからね」

と如何にも、科學者の妻らしい意見だつた。

龍樹先生と志氣太は、茶を呑みながら顔をしかめてその話を聞いてゐたが、やがて龍樹先生がいつた。

「いや、ところがどうもまた、さういふ狐や狸の親類が、少しづつ残つてゐるらしいから、困つたものだ。さういふ狐や狸みたいなのは、ほんの一匹か二匹あるだけなんだろうが、そのために、他の正しい商人まで、色眼鏡で見られる。少くとも、むじなかないたちぐらゐには、思はれるから氣の毒だ」

龍樹先生は、さういつて、撫然として髭をなせた。

志氣太は、苦笑しながら云つた。

「いまのお母さんのお話ですがね。それはなにも、さういふコセコセした狐や狸の親類は、いまお母さんのいはれた商賣に限らず、どのほかの世界にも、それからまた、富橋市に限らず富川町でも、古城町でも、多原町でも、藁郡町でも、いやそのほか何處の市でも町でも村にでも、一匹や二匹は、まだコソコソと残つて

ゐるらしいです。——これは、こないだ或る患者から訊いた話ですが、その人は富川工場に勤めてゐる人で、富川に家を持つてゐるんですが、なにしろ、重要な仕事の爲めに日曜も土曜もなしに、働いてゐる人ですし、子供もあつたりするこゝとですから、大事な栄養を補給する意味で、月に一つか二つ卵を欲しいと思つたさうですが、それがまア、配給の一寸した手違ひでうまく手にはいらぬ。ところが、町へ出てみると、或る料理屋の飾り窓に、卵が大皿へひとやま盛つてあつたんださうですが、ところがその卵は、その働く人には賣つて貰えず、その家で飲食遊興する人でなくては賣つてくれなかつたといふ、ま、むろん過去の話でせうが、これなどもまア狐か狸的現象の一つだと思ひますね。——それから、これもやはり、或る患者から聞いた富橋での話なんですが、いつだつたか、もう昔のことだらうと思ひますが、その人が久しぶりに街へ出たんださうですが、すると何んとかいふ食堂で、とたんに狐にだまされて銚子一本一圓といふ酒をたしかに

吞まされたとか云つて、受取りまで見せましたがね。これなど、受取りまで發行するんですから、流石に街に住んでゐる狐は新式だと感心しましたよ」

志氣太はさう云つてニヤニヤ笑つた。

すると、今度は龍樹先生が何か云ひたげに口をもぐもぐさしはじめた。

五

「うむ」

とやがて、龍樹先生が口をいれた。

「さういふ化物的現象なら、なかなか有名なのがあるナ——例へば、むろんもう今ではなくなつたことだらうが、名古屋方面から一日に何百匹といふ狐の大群が毎日のやうに、洋服を着てリュクサツクを背負ひ、ハイキング姿の男女に化けて白晝電車に乗つて馬窪附近の狸のところへワンサと押しかけ、薩摩芋や野菜の適

正配給を亂してゴソゴソと横から袋へ詰めこみ、人間電車變じて野菜電車になつたとかいふあの怪異譚だとか。——尤もこれなど、もう直ちに當局が取締りに出たことだし、例の「種物」はあつても「かけ」はないといふ。うどん屋の怪談にしても、業者自身立派に幽霊を追出してしまつたから、もう今では絶対にそんなことはないんだらうがナ……」

志氣太が、煙草に火をつけながら云つた。

「——いやしかし、いづれにしても、私がいま申上げたやうなことは、小狐や小狸の話でして、まだまだその上を行くやうな大狸や大狐が、必らず二匹や三匹はそこらにうろろろ生き残つてゐるんぢやないかと思ひますね。それからまた、私たち自身の心の中にも、變通自在、色々な形に化けた英米的な、大狸や小狸が、まだまだ生き残つてゐないとも限らないのですから、私たちは、さういふもろもろの妖怪變化を、お互ひに力づけ勵まし合つて、一匹残らず私たちの周圍から、

私たちの心の中から、追出すやうにしなければなるまいと思ひますね」

「ウム。そりや、全く、その通りぢやな」

龍樹先生は、やゝ面映ゆさうな顔つきで、髭をなぜながら云つた。

志氣太は平氣で續けた。

「——どうも、なんですね。今までの都市の人の一部には、藪だとか森だとかいふものは田舎にあるものだ、といふやうに考へてゐた人があつたやうですが、なるほど田舎にも森や藪はありますが、都會にも——現代の都市にも、どうしてなかなか狸や狐のチヨロチヨロ出はいりする藪や森やジャングルはあるんですから一體どちらが本當の草深い田舎であるかといふことは、よほどよく考へてからでなくては云へませんね。——實際、ジャングルを切り拓くのは、軍隊だけの仕事ではないですからね。私達自身も兵隊と同じ構へで銃後のジャングルを切り拓かなければなりませんよ。さういふ身邊のジャングルを見て見ぬふりをして、やれ

マレーやボルネオや蘭印にはジャングルといふものがあるさうだの、やれ、そのジャングルの中に暮してゐるあちらの住民の文化水準は、極めて低いさうだのなぞと、勝手なことばかりいつてゐると、それこそマニラやバンコックあたりのインテリに笑はれますよ。いや、笑はれるくらゐでは濟まないから困るです」

志氣太は、ほんたうに困るやうな顔をして、ウーンと體をそらした。

「ふム。それは、お前のいふ通りだ」と龍樹先生がいつた。

「しかしまあ、お互ひにだんだん目覺めて來たから、間もなく、お前達の理想とするやうな、さういふ立派な國內體制も、出來ると思ふな。わしは、日本人の國民的な良識といふものを信頼するよ」

「——ま、さうでせう。……實際私達の同胞の中には、心から悪い人間なぞといふ者は、一人だつてゐる筈はないんですから」

「そりやまアさうでせうがね、でもねえ……」
とこの時、悦が乗出した。

六

「男の方は、女ほどに買物にも出ませんから、それほどでもないでせうが」と、悦はいひ出した。

「この頃のやうに、商人衆に愛想ツ氣がなくなつて、突慳貪にあつかはれると、わたしみたいな氣の小さな女は、もうオドオドしてしまつて、必要な品物の買出しにも脚がすくんで自然と臆劫になり、配給だの何だのといふことよりも、そのことのはうが、どれだけ家事の能率にさはるかも知れませんね」

志氣太は、黙つたまま大きな顔を傾げて、母の言葉を聞いてゐたが、やがて、
「なる程、そりやア御尤もですね。まつたく、商人に限らず今の、客を扱つてゐ

る人達の中には、實際、どうかと思ふのがチヨイチヨイゐますからね。ジャバやボルネオの住民にも、面目のないやうなのがありますからねえ。……しかし」

志氣太は、葦の火をもみ消しながら、改まつていつた。

「しかしまた、一方、私にいはせると、少し、一般の消費者のはうでも、商人が不親切だ不親切だと、いひ過ぎますね。これもどうも、考へてみると、南方住民にも恥しいやうな、未開人的態度だと思ひますね。——少し極端なやうですが、私にいはすれば、従來の商人の親切さといふものよりは、むしろ、今の不親切のはうが、助かります」

「おやおや。急にまた、商人衆の肩を持ちだしたね。わたしはどうも、今のああいふ不親切は、とても野蠻だと思ひますね。昔のはうが、よつほど文明的でした」
「それはお母さん、違ひますよ」
と志氣太はキツパリ云つた。

「なにも私は、今の商人の中の一部の態度を、正しいだの、文化的だのとは申しませんが、ああいふ不親切といふものは確かに野蠻です。が、しかし、それは未開人のやうな單純な野蠻に過ぎないです。ところが、お母さんが文明的といはれた、その、昔の商人の親切といふものは、むろん例外も多々あるでせうが、その一部といふものは、これは野蠻どころか、もつと惡質なもんです。今の商人の中の一部の不親切さといふものを、ただの未開の森林とすれば、昔の商人の一部の親切さといふものは、狐や狸のゐるジャングルにも相當しませうね。——昔の商業は賣らんかな主義で、何んでもいいから兎に角お客様を、他所の店より少しでも多く引きつけて、しこたま金にしようといふ、英米的な古臭い野蠻なやりかたでしたから、自然とデラデラ心にもないお世辭をいひ、品物も狐や狸で實物以上に化け易い。甚だしいのになると、人間の生命を託する貴重な藥品に至るまで、とんでもない品物を、病人の迷ひやすい心理につけこんで、堂々とまことしやかに

宣傳し、うつとりするやうな親切顔をして賣つてゐた人もあつた。とまあいふやうな傾向が經濟全體に亘つて大勢を支配してゐたんです。お母さんはさういふ親切がお好きですか？」

「……」

「ところが、いよいよ日本も目覺めて、さういふ共仆れ式經濟から廻れ右をしたのです。すると商人の一部の態度がガラリと變つた。このガラリと變つたといふことを見ただけでも、今までの一部の親切といふものが、如何に欺瞞に満ちた英米のやりかたと同じやうなものであつたかといふことがお分りでせう。かういふのは私に云はすれば決して文明でも、文化的でもないのです」

志氣太は、さう云つて、ちよつと口をつぐんだ。

善良な母親は、ややめんくらつたやうな顔つきで、急にお喋りになりはじめた息子の顔を、だまつたまま見詰めてゐた。志氣太は、いい氣になつて、あとをつ

づけた。

七

「——ところで、そいつが、いまはどうかといひますといままでの、さういふ性の悪い狸や狐的な考へが追出されて、ただの、未開の森林に戻つたのですよ。ですから、いまの一部の商人の見せてゐる不親切といふものは、一見はなはだ面白くはないですが、しかし、あれには決してさういふ狸や狐はゐりません。同じ野蠻でも、もつと質のよい、未開の森林のやうな、素朴な野蠻さなのです。その人たちがそのことに気がつけば、すぐにも恥かしくなつて、やめてしまひたくなるやうな、幼稚な野蠻さなのです。ですから、私達は、そのことをよく誤解しないやうに噛みわけて、お互にたしなめ合ひ、はげまし合つて、その未開の森林を着々切り拂ひ焼き拂ひ、その上へ世界一の日本人としての誇りを以つて、今までの

親切とは全然違つた、新らしいほんたうの親切を、道徳を打ち立てるんです。(このへんから、志氣太の聲が、妙に鼻にひつかかりはじめた)むろん、東京や大阪の商人も——いやこれは、商人だけのことではない。誰も彼も——さういふことは考へはじめてゐるでせうが、しかし、私は、まづこれなども、私の郷土の人達に眞つ先にやつて貰ひ度いですね。これも、立派な文化運動の一つですよ。文化運動などといふものは、決して一部の指導者だけのものではない。みんながそれぞれ、その誇るべき擔當者なのです」

志氣太は、ここで急に口をつぐむと、例の大きな顔をしかめながら、頭をかきはじめた。

見れば、善良なる龍樹先生夫妻は、まるで叱られてでもゐるやうな恰好で、チツとうなだれたまゝ、伴の説を拜聴してゐるではないか。

(これは申譯ない。どうも俺は、先天的に脱線しやすく出来てをる)

思はず腹の中で眩きながら、苦々しい顔つきになつて、志氣太は立上らうとした。

と、その時。内玄関の格子戸が静かに開く音が聞えた。

悦は、すぐに立上つて行つたが、間もなく玄関の方で明るい聲が爆發した。

「おや、ちいさん。もうお歸り？——あら、信吉さんも、おやまア、それはそれは……さアどうぞお上りない。さアノ！」

明るい聲は、賑やかな氣配と共に廊下を流れて、悦の後ろから千尋と兄の信吉が現はれた。

「いやア。これはこれは、勇士の御訪問か——」

今まで睡つてゐたやうに静かだつた龍樹先生が、急に元氣付いて、やや威嚴をつくろひながら、歸還軍曹石渡信吉を迎へ入れた。

一應の、挨拶がはじまつた。

信吉は、自分の歸還の挨拶をすますと、妹が世話になつてゐる禮や、それから老龍樹先生の、體の工合を訊ねたりしてから、問はれるままに、戦地の話を、老先生に語りはじめた。

志氣太は、午後の應診が二軒ばかりあつたので、ゆつくりするやう斷つて家を出た。

が、一時間ばかりして戻つて來ると、ちやうど信吉が、家の者達に送られて、一人で門を出るところだつた。

「おや。もうお歸り？」

「え。これから富川へ出て、砥鹿神社へ參拜したいと思ひますから……」

志氣太は、ちよつと考へてゐたが、すぐにいつた。

「よし。ちやアひとつ、僕も附合はふ。——もう仕事も、濟んだからね」

志氣太と信吉は、連れだつて倉松醫院の門を出た。

千尋は、その二人の後姿を見送りながら、兄の背中に、淡い妬みのやうなものを、ふと覺えた。けれど、すぐにそれは、やすらかな安堵にも似た親愛の氣持に變つて行つた。

——自分も、いつしよに行かして貰ふことが出来るならば、嬉しいには違ひない。けれど、志氣太と兄の二人だけが、あんなにも心易げに、肩を並べて出て行くのを、なんの不安も不思議もない氣持で、静かに見送つてゐることは、いつそ、う深い愉しさであるやうに、ふと千尋は思つたからであつた。

千尋は、診察室へ、志氣太の鞆を持つて戻つて來ると、机の前へ腰を下ろして應診患者のカルテを處理しはじめた。

カルテの上に書いてある、例の志氣太の、蟻の行列みたいな小さな假名文字を見てゐると、その下から、あの野放圖もない大きな志氣太の顔や體や平素の言動が浮び上つて來て、思はず微笑ましい豊かな氣持になり、仕事を運ぶ手先も明るく心愉しく動くのだつた。

すると彼女は、ふとさういふ自分の氣持に、云ひやうもない甘さを覺えて、急にはげしい嫌惡に襲はれた。

(あたしはいま、まるで、倉松家の若い主婦のやうな氣持でゐる！)

——まア、なんてあたしは、いけない娘だらう。そして、なんてオバカさんなのだらう！

千尋は、志氣太の眼を思ひ出した。炯々と叡智に輝く鋭い眼を思ひ出した。その眼は、千尋はおろか、ほかのどんな女性にも、愛情にも、まるで關心を持つてはゐないやうな、いつも、なにか遠くのはうをばかりみつめてゐるやうな、冷た

くさへ思はれる光りを湛へてゐるではなかつたか。

千尋は、顔をあげた。かなしい反省に洗はれたやうな白い顔だつた。

(ほんとにあたしは、この家では、龍樹先生からも小母さまからも、家族のやうに愛されてゐる。けれど志氣太さんにとつては、あたしはたゞ一人の忠實な助手に過ぎないのではないか。それ以外の何者でもない筈ではないか。それなのに、あたしは今、まるでこの家の若い主婦でもあるかのやうな感情を、勝手に弄んだ。ああなんていけない娘なのだらう。なんてお甘さんなのだらう)

千尋は顔をめぐらして、すぐ目の前の白い明るいガラス張の器具棚を見た。

その中には様々な醫療器具にまじつて、何本かのかなしいまでに透明な試験管が、きちんと並んで立つてゐた。千尋はふと、その試験管の冷たい光りの中に、自分のこのころを感じた。胸が、チクチクと痛みだすのを覺えた。

と、この時――

玄關の方で、あわただしい足音がして、いましがた出て行つたばかりの、志氣太の大きな聲が聞えて來た。

「おーい、ちいさん」

「はい」

弾かれたやうに千尋は立ち上ると、いそいで玄關へ出て行つた。

そこには志氣太が途中からあわてて引き返してもして來たのであらう、大きな肩を波打たせながら立つてゐたが、千尋を見るといきなり云つた。

「あ、ちいさん。財布を忘れちまつた。濟まんが持つて來てくれ」

九

青柳村へ歸つて以來の、志氣太のこれまでの觀察によると、志氣太の郷里を中心としたこの地方へ最も大きな、最も決定的な影響を與へてゐるところの尖鋭な

時代現象の一つは、富川の町の向ふへ出来た例の尨大な重要工場にあつた。

この大きな施設の存在を無視して今日の志氣太の郷土を語ることも出来なければ、またこの重要施設がこの地方一帯に與へてゐるところの潑刺たる影響を無視して、青柳村における志氣太の新しい仕事を計畫立てることは、無意味に等しかつた。

そこで志氣太は、この工場の置かれた地元である富川の町やその附近へも、いつか一度は機會があつたならば行つて見たいと、暫らく前から思つてゐた。

で今日、はからずも千尋の兄の信吉の訪問を受けて、これからその町の方へ出掛けると聞かされると、すぐに志氣太は決心して、一緒に行くことにしたのであつた。

忘れた財布を千尋の手から受け取つて信吉へ追附くと、二人は肩を並べて、新緑の村道を歩き出した。

「歸還されても何かと忙がしいだらうね」

「ええ。いろいろ廻るところがありましたね」

「さうだらうね」

「明日はこれで、高瀬の陸軍病院へ行きたいと思つてをります。あそこに戦友が二人ばかり来てゐますから……」

「ああ、白衣の勇士だね。それは大事なことだ。お義理の挨拶廻りなどは違ふから……」

「さうです。まア兄弟に逢ひに行くやうな氣持ですよ」

二人は再び黙つて歩きだした。

志氣太は、信吉に、あまり戦地のことを訊ねなかつた。

それは、決して志氣太が、無愛想なからでもなければ、また決して、戦地のことについて無關心であるからでもなかつた。

——戦地で、兵士たちが経て来たであらうやうな、峻烈きはまる戦ひの生活は兵士自身といへどもとても説明の出来るやうなものではなく、徒らに語り手の氣持を苛立たせるばかりであらうと、志氣太は深く思ひやつたからであつた。

さういふ志氣太の態度なり氣持なりは、問はず語らず信吉の心にも通するのであらうか、信吉の志氣太に對する打解けた態度には、ほかの誰に對する親愛よりも、やすらかな落つきを見せてゐるやうであつた。

二人は、間もなくバスに乗つて、富川の町に出た。

このやうな田舎には、一見奇異に思はれるくらゐな、立派な四階建のその町の驛で、このすぐ奥にある市宮までの切符を買ふと、富橋からこの町を通つて、すつと奥地にまで走つてゐる電車へ乗るためにホームへ出た。

ホームは、まだ工場の退け時とも思はれないのに、夥しい乗客であふれてゐた。

「なかなか大勢なお客だね。いつもこんなだらうか？」

志氣太は、驚いたやうに信吉へいつた。

「さうですね。たぶん砥鹿神社へ參拜する客でせう。なにしろ、ご存じのやうに砥鹿神社は、この邊ではいちばん社格の高いお宮さんですからね。私が、應召前に時折參拜しました折にもなかなか大勢の人でした。——しかしそれにしても、ちよつと今日は、人出が多過ぎますね」

だが、その疑問は、やがて二人が満員電車に乗つて、青々とした桑畑の中を、市宮村へ近づくにつれて、解かれて来た。

——どうやら今日は、ちやうど砥鹿神社の祭禮日にあたるらしい。

十

「やつぱりお祭りださうですよ。恰度また、うまい時にやつて来たものですね」大勢の客たちと一緒に電車の中から押し出されながら、信吉がなんといふこと

なしに、志氣太へ云つた。

砥鹿神社の祭禮といへば、この近在でも大きな祭の一つで、五月始めの、麥刈りにはまだ遠く、そろそろ春蠶の掃立にかからうとする爽かな季節に、二日に亘つて催されるこの祭禮には、毎年きまつて近在の村や町から、素朴な人々の夥しい群れが、或は徒歩で、或は電車で、或はまた自轉車で、桑畑の道といふ道にあふれるばかりになつて引きもきらずに詰めかけて來るのであつた。

さういふ人々の流れに押し流されるやうにしながら、二人は埃りの道を、宮の森の方へ歩いて行つた。

廣々とした境内の中には、其處彼處に天幕張の小さな小屋掛けがあつて「浪子と武夫」や「織子いちめ」で子供のころの記憶にある（のぞき）だの（熊娘）だのの見せ物が、ドサ廻りのケバケバしい（小レヴェー）一座と軒をつらねて朴訥な人々を吸ひよせてをり、志氣太を少からず面喰らはせた。

けれど、すぐに志氣太の注意は、道の兩側にズラリと並んだ無数の露店商の店先へ奪はれて行つた。

そこには、ほとんど大部分の店先に、様々な泥繪具で隈取つた（鐘馗）や（おかめ）の張子の面が、附木のやうな薄板の羽根に彩色した風車などといつしよに並べられてゐて、思はず志氣太の氣持を明るくさせた。

「あゝ、これはね、志氣太さん。この面と風車は、富橋の近くの小酒井の祭りにも出て來ますが、これは、どうしてなかなか立派な民藝品ですよ」と、歩きながら信吉がいつた。

「——いまではどうだかよく知りませんが、この面や風車を作る人は、お百姓の中にあるんださうですよ。そして昔は面造りのお百姓の中にも、それぞれ格附があつたりして、なかなか盛んなものだったらしいですね」

「ほう。それは初耳だ。しかし、いい話だね。——いづれにしても、この面と風

車には、しみじみとした土の香りがあつて、ちよつと美しいと思ふなア」

志氣太は、店先の一隅をあごで指しながら、

「少くとも、ああいふ何處のデパートにでもありさうな、ギラギラしたセルロイドの風車などよりは、どれだけ優れてゐるかわからないね」

あるきながら、しきりに感心しはじめた。

もとより志氣太は、このやうな特殊な民藝品だの、それから地方特有の民謡だの踊りだの行事だのをばかり掘り出して来て、それで以つて地方の文化を云々しようなどといふ、ケチな男ではない。けれど、かういふ事物が持つてゐる眞の素朴な美しさを視る人の眼が、あとから流れ込んで来た低俗な商品文化のために往々にして歪曲されやすいことに、はげしい反撥を覚えるのだつた。

二人は、やがて、御紋を頂く立派な幕をめぐらした、簡素な神前に、敬虔な氣持でぬかづくと、道を引返して驛へ戻つた。

ホームは、富川の驛にも劣らぬ大勢の乗客であふれてゐて、思はず志氣太は眼をみはつた。

やがて電車が来た。

すると、いつそ驚くべきことが、志氣太の眼の前で起きあがつた。

十一

驛のホームには爺さんや婆さんや、子供たちまで入りまじつた善良な田舎の人々が、鈴なりになつてあふれてゐたのであるが、やがて電車がくると、その人たちの和やかな形相が一變して、忽ち、驛員の熱心な制止も聞かばこそ、まだ中の人降らない先から、ワツとばかり入口に向つて殺到しはじめたのだつた。

志氣太は決して、東京といふ大都市を、色々の意味で理想の街とは思つてゐなかつた。けれど、その東京にも、このやうな風景は、今では決して見られない筈

であつた。

——二人は満員電車の片隅に乘せられて、辛くも富川の町へ辿りつくことが出来た。

「もう六時だね。おそくなつたなア」

「兎に角、稻荷さんだけ行つて来ませう」

二人は土産物を商ふ商家の軒並にならんだ驛前の大通りを歩きはじめた。

その通りの向ふからは、恰度工場の退け時なのであらう、こないだ村の新道で志氣太が出會つたやうな大勢の工員たちが脇見もせず、まつすぐ驛の方へ向つて黙々と歩きつづけてゐた。

志氣太は歩きながらも、その人たちのすこやかな歩調にうつとり見とれた。それは一つの偉觀だつた。

富川稻荷——といへば東京の赤坂にも分院があり、市電の停留所まで出来てゐる

ようといふ、この近在はおろか全国にまで知られた靈驗いやちこなるお稻荷さまで、學校なども經營してをり、年々歳々何千何萬といふ善男善女が各地から參詣に押し寄せ、會ての志氣太の記憶によれば、いつ來ても町の中にはさういふ人々の群れがあふれてゐたのであるが、それが今、さういふ參詣客相手の土産物屋や食堂や料理屋ばかりがズラリと賑かに軒をつらねた町の中を、志氣太の記憶にあるいかなる講中よりも、いかなる團體よりも大勢の、しかも富川稻荷とは直接なんの關係もない、働く工場の人々が、町を貫き覆ふて黒々と流れつづいてゐるのだつた。

「むゝ」

と思はず志氣太が、眼をみはつたのも無理はない。

これは正に、一大偉觀であつた。志氣太はその光景の中に、この地方の持つ新しい性格の一つの縮圖を見た。

といつても、なにも富川の町が時代の流れから取残されてゐるといふわけでは決してない。いやそれどころか、熱心なる町民たちは、新らしい事態に進んで即應すべく（新興工都）建設のため、着々諸般の施設の再建擴大に努力しはじめてゐるのであつて、志氣太も、さういふことは折にふれ龍樹先生から聞かされてゐた。が、それにもかかはらず、この異様な眺めは思はず志氣太をして、深く眼をみはらせずにはをかなかつたのだ。

やがて二人は、金屬の飾りをふんだんにちりばめた、流石に豪勢なお稻荷さんの山門へ來た。

が、境内にはいると、いつそう二人を驚歎せしめるやうな、世にも豪華な眺めが、展開されはじめた。

——大砲のやうな巨大なる釣鐘。お稻荷様の神通力で以つていまにも新鋭軍艦のマストに早變りしさうな、豪壯きはまる青銅の大燈籠。さては、立派な墓口の

やうに、いや、装甲車のやうにガッチリした、赤ガネ張りの巨大な賽錢箱、等々いづれも簡素な砥鹿神社で受けた感銘とは、又ひとしほ異つた感銘を以つて、ソクソクと二人の胸に迫るのだった。

やがて二人は、境内を一巡すると、山門の外へ出た。

十二

二人は、並んで、門前の通りをあるき出した。

ここにも驛前の通りと同じやうに、土産物を賣る店や飲食店がズラリと賑やかに軒をつらね、ふと見かけた道傍の横町には、またいつそ別の賑やかな世界でもあるのか、なまめかしい女の姿さへチラリと覗かれた。

「なにを探してゐるのかね？」

さつきから信吉が、しきりに左右の店々を物色してゐるらしい様子に、ふと志

氣太は氣づいて訊ねた。

「はア、煙草を探してるんですがね。もうさつき驛へ降りるから、氣をつけてるんですが、どこの店にもないんですよ」

「ああ、さういへば、僕も箱だけになつてしまつて困つてるんだが……生憎、賣切れとみえるね」

二人は、そのまま暫くあるいた。とやがて急に、志氣太が立ちどまつて、信吉へいつた。

「あ、信吉君。こここの店に、煙草が澤山あるよ」

信吉は、その聲にびつくりしたやうに立ちどまつた。が、すぐに道の傍らを見て、思はずわらひ出した。

——そこにはちやうど、何軒かの射的屋が、道の兩側に並んでゐるのだつた。

いろいろな煙草を、薄い細長い紙で吊つて、横木にズラリと並べてブラ下げた

り、小さな臺の上にさまざまな形に積みあげたりして、それを客に鐵砲で以つて撃ち落させるといふ、何處の盛り場にも見かけるやうなその射的屋の店先には、いづれも化粧をした婦人達が坐つてゐて、店の前にたかつてゐる幾人かの若い男達の話相手になつたり、鐵砲撃ちの相手になつたりして笑ひさざめいてゐるのだつた。

「はは……これは駄目ですよ志氣太さん。この店に並んでゐる煙草は、鐵砲で撃ち落さなきやア貰へないですよ」

信吉の言葉に、志氣太は妙に顔を歪めた。

「お寄りなさいまし」

と、すぐ前の射的屋の婦人が二人に聲をかけた。二人は急に困つたやうな顔をして、眼を見合せた。

すると今度は、二人の後ろの方にある店の婦人が

「ちよつと、お二人さん。お寄りなさいよ。一發撃つて頂戴な」
「お寄りなさいまし。ね、お寄りなさいまし」

前の婦人も負けずに聲をかけた。

二人はいよいよ困つたやうな顔になつて、いささかマゴマゴし始めた。が、やがて志氣太が、ニヤリと笑ひながら信吉へ云つた。

「さうだつたねえ。——ぢやア信吉君。折角ああ云つてくれるのだから、一發撃つて來たらどうだね。さうすれば、煙草も手に這入るわけだからね。あんたは實戰で鍛へあげた射撃の腕前を持つてゐるのだから、あんなものぐらゐ何んでもないだらう」

「はア、そりやア、こんなものはおもちやですがね——」

信吉は困つたやうな苦笑を浮べてゐたが、やがて、思ひ切つたやうに

「ぢやア、一つやつて見ませうか。あなたの分も撃つて來ませう」

さう云つて、やや面映ゆさうに一軒の射的屋の前へ歩みよると、きまり悪さうに鐵砲をとりあげて、向ふにぶら下げてある煙草の一つへ狙ひをつけた。が、狙ひながら、急に何を見たのか思ひついたので、みるみる顔を白くさせながら、首を振つて鐵砲を置き、そのまゝ志氣太の方へ戻つて來た。

十三

「どうしたんだね？ 撃たないのかね」

鐵砲を撃つことをやめて引き返して來た歸還軍曹石渡信吉へ、志氣太はいぶかしさうにさう聲をかけた。

すると信吉は、苦り切つて首を振りながら、小さな聲で、だがキツパリと云つた。

「駄目です。あれは撃てません。あれはとても撃てません」

「撃てない？ それはまたどうしたことだね。あんたのやうな射撃の名人が……」
「いや駄目です。あれは駄目です。そりやア始めは煙草を手に入れたさに、なにげなくやつてみるつもりだったんですが、ところが鐵砲を持つて煙草を狙つたとたん、ふと大日本帝國專賣局のマークが眼についたんです」

信吉は歩き出しながら、ひどくクソ眞面目な口調になつて云つた。

「ねえ、志氣太さん。私の射撃は日本の敵を撃つ射撃でして、たとへ煙草といへども、大日本帝國のマークを狙ふことは斷じて出来ません」

信吉は射的屋の店の方をチラリとみながら

「それに志氣太さん。考へてみれば、あれは一體どういふことですか。——いやしくも大日本帝國の文字のはいつた煙草を、首吊りさしたり、獄門臺みたいなものの上に晒したりして、しかもそれを日本人自身が、それも國家の中堅たるべき銃後の青年たちが、面白さうに鐵砲で狙ひ撃ちにしてゐる——あれは一體どうい

ふことですか？」

言葉は静かだったが、その底には烈々たる氣魄がみなぎつてゐた。

「ウーム」

と志氣太は、思はず唸つた。

「——なるほど、さういへばたしかに妙なことだねえ」

「いや。妙なことどころではありませんよ。なんだか、ユダヤの陰謀とやらはでも、引つかかつてるみたいないな、穩かならぬ話ですよ」

「はは……シオニストの謀略かネ——」

志氣太は、思はずほほえみながら、

「——しかしいづれにしても、いろいろな意味で、これは一考を要するね。むろん、あの商賣をしてゐる人達も、また、そこで遊んでゐるやうな連中も、そんなことはとんと知らずにやつてゐるのだらうが、でも兎に角、考へて見れば穩かな

らぬことだから、ひとつ、なんだね、これからは、あの煙草の代りに、ルーズヅ
エルトやチャーチルの顔を書いた紙をブラ下げたり、或は、米英の戦艦や航空母
艦なんかを乗つけて、そいつでも撃たせるんだね、そして褒美に、煙草を出せば
いい」

志氣太はいひかけて、ふと思ひついたやうに、

「だが、待ち給へよ。煙草といへば、さういふことが判ればもう撃つて取ること
は出来ないが、ひとつ僕が行つて交渉してみよう。話せば別に譲つてくれるかも
判らないから……電車を待つ間に一服したいからね」

志氣太は、ノコノコとさつきの店へ引返しはじめた。

その店では、店番の婦人が、撃ちかけてやめてしまふやうな野暮天な客はケロ
リと忘れた容子で、一本の（金鵝）に火を吸ひつけ、そいつを、前に立つてゐる
カーキ服の青年に、なまめかしい手つきで渡さうとしてゐた。

志氣太は、そのありさまをハッキリと認めると、急に立ちどまつて、そのまま
黙つて信吉のはうへ引返した。

二人は、やがて富川の町をあとにした。

定森喜惣の家では、豚を八頭飼つてゐる。

そのほか、鶏が十三羽、兎が五匹ゐる。が、なんといつても豚がいちばん大家族だけに、これが最も手がかかる。

で、今日も、土曜日で三時頃に役場をさがつて來ると、土間へ自轉車を投げ込んで置いて、納屋のはうへ出掛けて行つた。

先のまがつたやうな十能をとり出して、孵化場から買つて來た出來損こなひの卵屑を、バケツの大きな奴へ詰めはじめる。

——これが、豚の餌である。

バケツへたつたつばいの卵屑が、八頭の豚の餌？

と或は、疑問を抱くかたがあるかも知れない。けれど、實際これが、八頭の豚の半日分の餌なのである。といつても、むろん、配給だの割當だのといつたものではなく、喜惣の家で、いろいろと工夫して、まかなつてゐる餌なのである。

まづたくこの頃は、豚でも鶏でも、飼料が不十分で困つてゐる。食糧を節約しなければならぬのは、人間ばかりではないのである。喜惣の家の八頭の豚も昔は味噌粕だの小糠だのと、鹽氣の多い御馳走がふんだんにあつたのであるが、この頃では、苦心の結果買ひ集めた卵屑だの、根菜の腐つたのだのを、それもほんの少しばかり貰ふだけである。

けれども彼等は、人間のやうに、すぐに燃りが戻けてブツクサと下らぬ愚痴をこぼしたりするやうなことはせず、チツと黙つて辛棒してゐるのである。

かういふ高い精神の持主たちの、みだりに口にしない心情を充分に察してやりながら、色々と工面をしなければならぬのであるから、喜惣の苦心も、いや百姓の苦心も並大抵のものではない。だから、

「かういふ時になると、お百姓の方がいいね」

などと軽卒な言葉を、時折町から来た人に向けられたりすると、喜惣は笑ひながら

「ぢやア一つ、百姓をやつてごらんなさい」

と静かに、たしなめるのである。

實際、百姓といへども、どうして／＼樂ではない。人手不足のところへもつてきて、田畑の肥料も生き物の飼料も、自給しなければならず、その上農具も思ふやうには手に入らない。しかも、そのやうな条件の中で、大事な食糧の増産はしなければならぬし、そのほか各種重要農産物の供出はあり、繭といへども一定量

は確保しなければならぬのだ。大變である。

けれど、むろん喜惣は、そのやうなことには、決してへこたれない。いやそれどころか、口にこそ出してはいはないが、さういふ色々な苦勞が重なれば重なるほど、喜惣の心は豊かになり、明るい闘志が全身にみなぎるのだ。さういふ困難を戦線の兵士と同じ心で一つ一つ克服して行くことが、とりもなほさず輝く彼岸に達する唯一の道であることを堅く信じてゐるからだ。

であるから、たとへ豚共の飼料は思ふにまかせず、またさりとて、今さら手放さうにも豚の自由販賣は出来ない、なぞといふやうなことくらゐには決してへこまず、しみつたれた愚痴なぞ口が裂けてもこぼさないのである。

——やがて餌は出來た。

さだめし待ちかねてゐるであらうと、喜惣はバケツをさげて豚舎へ急いだ。ところが豚舎の前までやつてきた彼は、ひと目その中を見て、思はずあツと叫んだ。

なんと、その低い柵の中には何處へ逃げ出したか藻抜けのカラで、八頭の豚は一匹もゐないのである。

二

豚舎の中の八頭の豚が一匹残らず姿をくらましてゐるを見て、あつとばかりびつくりした喜惣は、バケツをさげたまゝしばし茫然と立辣んでしまった。
(なんといふ謀叛人どもであらう！)

けれど、事態は火急にして拱手傍觀をゆるさない。

たちまち喜惣は蒼白な顔になると、あわててあたりを見廻した。が、豚共の姿は何處にも見えない。

喜惣は、バケツをその場に置いたまゝ、豚舎の周圍をグルツとひと巡りしてみた。が、相變らず豚共の行衛はわからない。

喜惣は、母屋へ駈け戻ると、

「おーい。おーい」

聲を出して家の者と呼んでみた。が、父も母も、畑へ出てゐるとみえて、應へはない。

「敏、——敏はをっんか！」

富川の工場へ出てゐる清の、そのまた下の妹の名を呼んでみた。が、これも畑へ出てゐるとみえて返事はない。

「チエツ」

思はず舌打ちしながら、戸外へ出ると、今度は、家の周圍をグルリと廻りはじめた。

けれども、豚共の姿は杳としてみつからない。

やがて、母屋の前を通り抜けて、豚舎とは反對の側にある穀倉の前まで来ると

喜惣はハツとなつて立ちどまつた。

その穀倉の入口には、大事な種芋に使ふ上等のジャガ芋が二俵置いてあつたのであるが、そのうちの一俵がバラバラに引裂かれて、中味の芋が一つ残らず消え失せてゐるのだ。

みるみる喜惣の顔が蒼から赤に變つた。ダダツとばかりかけ寄ると、破れた俵をつまんで振つてみる。が、芋は一つもところがない。

喜惣は思はずギリギリツと齒をかみ鳴らした。

——そもそもこの芋たるや、半歳にわたる定森一家の丹精の結晶であつて、農會へ供出した残りを今年の種芋にしようとして、大事にとつておいた代物であり、一俵少くとも七圓はする。いやこの際金銭などには代へがたい貴重な食糧増産の源泉なのだ。

それをむざむざとやられてしまつたのであるから、流石の喜惣も遂に勘忍袋の

緒を切つた。

——いふまでもなく相手は遁走した豚共である。

喜惣は破れた俵を投げ捨てると傍にあつた棍棒と繩を手にとつて、ぶるぶるツと一つ武者顛ひしながら、表の方へかけ出さうとした。

と、この時——駈出さうとしたのであるが、ふと南に面した穀倉の横の軒下を見て、思はず眼をみはつた。

見ればなんと、その軒下に、例の八頭が、久しぶりに御馳走を鱈腹食つていい氣持になつたのであらう、ズラリと並んで横になり、折柄の暖かな陽射しを満身に浴びながら、短い脚を横に投げ出して（豚といへども）と云はぬばかりの顔つきで、グウグウと睡りつづけてゐるではないか。

いきなり喜惣は飛び込むと、最初の奴の尻をガンとぶん殴つた。ギユツといふやうな音を立てて殴られた豚がはね起きた。すると、あとの七頭も一齊に眼をさ

まし、起きあがり、あわててウロウロと勝手な方角へ逃げはじめた。喜惣もちよつとうろたへはじめた。が、すぐに一番大きな、脚の速い、そして一番悪い方角へ逃げて行く奴を追ひかけた。するとそいつは、表へ飛び出した。と、とたんに村道を疾つてきた一臺の自轉車とあつといふ間に衝突し、豚も自轉車もデンとばかりひつくり返つた。

三

表へ逃げ出したところでいきなり自轉車と衝突した豚は、ギヤアとかなしげな悲鳴をあげると、片足ちんばを曳きながらあわててひとつところをウロウロと逃げまどひはじめた。

そいつへすかさずかけ寄つて有無をいさす繩をかけると、喜惣は始めて、轉んだ自轉車の主のはうを見た。

それは、志氣太だつた。

「あ、倉松さんでしたか！ どうもすみませんでした」

「なんだい、君の家の豚かね。僕はまた、俵がころがり出して来たかと思つたよ」

志氣太は、腰のあたりを拂ひながら自轉車を起すと、全く俵に短い足をくつつけたやうな、豚の恰好を見ながら、

「どうも、定森君には、よく轉ろばされるね」

「いやどうも、すみませんでした。——往診のお歸りですか？」

「あゝ。——どうしたんだね、この豚は？」

喜惣は、今日の出来事と、生きものを飼つてゐる百姓の最近の事情とを、手短かに話したあとで、つけ加へた。

「まあしかし、なんとかうまくやるつもりですよ。——富橋の市役所へでも頼んでみて、あの街の一般家庭から、厨芥を集めさして貰はうかとも思つてゐます。」

むろん、もうやつてる人もあるでせうが、そいつをもつと、業者を結集して組織的にやつてみようと思つてゐます」

喜惣は、いひかけて、ふと思ひついたやうに、

「あ、それから倉松さん。こないだお願いしました文化部の話、あれから早速仲間たちに話しましたところ、みんなすつかり喜んちまひましてね。いよいよ一段と活潑にはじめますよ」

「ほう、それはよかつたね。——あゝ、さうだ。さういへば、君に折入つて話すことがあつた」

志氣太は、ふとなにかを思ひついたやうに、自転車を傍らに立てかけると、かくしから煙草をとり出して火をつけながら、

「——實は、ほかでもないんだがね。こんど、君たちの仲間へ入れて貰つた、記念といつてはをかしいが、青柳村に、圖書館をひとつ、僕が寄附したいと思ふん

だがね」

「え。圖書館を！ あなたが……」

と喜惣は、豚の繩をひつばつたまゝ、びつくりしたやうに眼をみはつた。

「いや、まアそんなにびつくりするほどのことぢやアないよ」

喜惣の顔を見ながら志氣太は、人の好きそうな微笑をふくんだ聲でいつた。

「——圖書館を寄附するなぞといつても、なにも、そんな大きな立派な圖書館を建物ごと寄附しようなどといふわけぢやアないんだ。むろんそんなことは、いままぐ僕に出来ることぢやアなし、又、だいいち、そんなものは青柳村には必要ない。僕が寄附しようといふのは、圖書館などに坐り込んでゐられない忙しい村の人たちが、いつでも勝手に、呑気に無料で持出して、ゆつくり利用出来る、一風變つた貸出し専門の圖書館なんだ」

「はアなるほど。——貸出し専門の圖書館！」